BRIDGE

大きな二 つ 0) プ 口 ペラが、 ごうごうと音をあげ 回

りだす。

わたしたちを乗せたへりは、 回転数が上がり、 やが て機体が宙に浮 朱色に染まる空へ向け

て舞い上がった。

と座っていた。 わたしたちは、 機体は、 たった二人を運ぶためには 広 い空間の隅っこで寄り添 ひどく 41 大き ぽ 41

いる。 プロペラの轟音や機体の振動は、 密閉された静かな機内は、 揺 れもあまり感じ ほとんど遮断されて 11

放 立ち並んでいたはずの一 戻ってこられたなんて、 ていた。 い焼け野原が広がっている。コギトと呼ばれた怪物が 窓の外に目をやった。 った閃光と爆発は、 これだけ巨大な爆発の中心にいて、 かなりの広範囲に被害を及ぼ 帯に、 嘘みたいだ。 つ いさっきまで民家やビ その面影を感じさせな 無傷 ル が

るようになる。 ヘリが高度を上げていくと、 夕焼けの色に、 やがて街全体が見渡せ 街は染まっている。

どこか他人事のようだった。

遠くに見えるあ

0

輝きが、

が行き交って、 どこにでもある、 マンション ありふ れ 0) た街並 ベラン ダ み。 12 洗 今にも車や人 濯物を取

込む人の姿が現れたって不思議じ やな W

でもここには、 そんな普通にあるも のは 何ひと つ

形だけでからっぽ

0

死んだ街なのだ。

高度を安

定させ、 ゆっくりと旋回するヘリは、 まるで遊覧飛行

のように街の景色をじっくりわたしに見せた。 リがほとんど一八〇 度回ったころ、

わたし

0 目

あ 0) 光景が再 び映 った。

輝きに夕陽の橙が混ざり合い 鈍 く光る、 碧 0 卵。 内 側に光をはらん 妖しい色を放 で 11 る 9 7 よう な

11 つか地球上のすべてがあの色に変わると、 ミレ

は った。

死 食されて そ は、 の言葉を裏付けるように いる。 着実に目の前まで迫ってきていた。 やがて世界を覆い尽く 大地 0 す 部 はすで ゆ る Þ か に 浸

それな のに、 まだ恐怖心や危機感はぼやけ 7 41 7

綺麗だとか、 わることなんて想像もつかないし、 そんなふうに思えるく まるでリア らいに。 世 ´リテ 界が終

を感じることができない。

いた。

がごちゃ た現実や常識 は そ 眠 れく 混ぜになった奇想天外な夢を見て 7 5 41 て、 か 今日 ら Ú 記憶の片隅 0 遠く 出来事は今まで か 0 け 離れて いろんなフ いる。 わ た 1 いるんだと 実 0 見 は 彐 わ

「んー……」

思うほうが、

ず

いぶんし

ŋ

ときた。

不意に隣からう 向 いた。 わごとが聞こえ、 わ た 0 視 は

でから糸が切れたように眠り込んでい の街をわた に見せ た張本 は た。 IJ 13 乗り込ん

戦 ていた時とは別人のようだ。 でもその 顔は 戦

見れば見るほどあどけなく映る寝顔は、

コ

ギ

を証明するように黒 いススで汚れていた。

今まで、 そこでミレイは、 何もない 人 と思っていた壁 知れず戦 9 0) 向こう た か 側 に生きて

ら。 た は 街 0) 光を浴びち ゃ 11 け な 61 間 か

から彼女は、 ように 13 か 彼女も外の世界から隠された存在なのだ。 0) あの 場に自分が の言葉を思 いなかったことにした。 41 出 す。 0 場 所 同

いる がら。 イはきっ と、 自分が背負っ ているものを理解

b戦った次の瞬間には、 いわなくても気持ちを察していたり、 意見なんて聞かずに人を振り回したかと思えば 遊び疲れた小さな子どもみたい 獣のように 何

という人間がよくわからない。 ミレイの顔はころころと変わ り、 わたしはまだ彼女

に眠っている。

ていることだけは感じる。 それでも、 彼女がわたしとはまるで違う次元に生き

はある。 大きなものを背負うだけの意志と、 それはどうしたって、 わたしには持てないも 強さが、 彼女に

あたし、 あんたと同じだもん。

のだ。

……全然、違うよ」

た。 弱々しい声でつぶやいた言葉は、 すぐに消えていっ

たしは素直にそれに従う。 すうっと眠気がやってきて、 まぶたが重くなり、 わ

こない。 わたしが、 ミレイと同じように戦うなんて、できっ 5 QUE:03 そのまちで / Butterfly friends.

だって、 は入野マナ。

そのまちで QUE:03

Butterfly friends

CHAPTER=1

う民家やビル た。 目が覚めると、 窓から、 はなく、 地上のヘリポ リは エディプスの施設らしき建物が ゆ トが見える。 くりと降下をはじめ 周囲にはも 7

立ち並んでいる。

着陸し、 エンジンを止めたヘリは、 地面に吸 い込ま

だ

たと思う)、

を引き連れてや

ってきた。

彼らは

(多分二〇

端 れ るように降下を始めた。 た。 薄暗、 になって なる。 いるのだ。 灯りは、 機内の小さな電灯だ 地下に潜ると、 リポ ートがそのままエ 室内 け は 途

てきた。 その時 操縦席 0) 扉が 開 11 男 0 が ひとり

ようだ。 は ちもたくさん見かけたけ 黒のブ 一目で違 ッ。 それ 施設の中では白衣や普通のネクタ ルゾンジ いがわ が 『ブラックバ かる。 ヤ ケ ツ 1 بخ ド それら普通の 力 ゴ のユニ ツ フォ 13 職員たちと イ姿の 黒革 4 0

目立つ大きな傷跡がある。 ている。 「そろそろ本部に到着する。 か 彼 引き締まっ のように色が薄くて、 は 0) 口 その ツ コギトが消滅したあと、 ク た輪郭に、 バ 風貌はエディ ンドのメン 切れ長の目。 バ プスの職員というより、 両耳には黒いピ ざっくりした短髪は 自分で歩けそうか み たいだ。 ヘリで他の 左目の下 ア 隊員た ス が <u>.</u> ج ア は ッ

数値を計 こったり、 爆発の起こった周辺で、 コギ 何 1 身

見たこともない機器を片手に

か

体 0 見える 破片を回 いる中で、 か 彼 9 た。 収 が 彼だ そ 他 ら。 け ŋ 0 0 は 隊員たちがそれぞ 中 全体を見渡して、 0 IJ た。 ダ 周 で 囲 あ れ ること 比 何か べず 時 指示を 作業を わ ž

わたしは大丈夫です。 け شک :

たり

してい

たか

まだぐ つすり 眠るミレ イ 視線を移す。 ガ ス 欠 0 車

みたいに動く気配がな 11

抱えてい 1 くよ のことなら気に なく 7 11 11 そ 11 は 俺

ナミの部下だ。 「そういえば自己紹 彼は、 エディ ミレイ プ ス特殊機 0) よろしく 無防備 介が まだだ 動課 な寝 の顔を見 所 属。 9 た 要する ね 7 失笑 俺 に、 は 串に 田だ

軽 にく握手 41 した。 って串 田さんは手を差し 出 わ た たち

に見える身体 まくり 皮膚 上げ は堅 iż た 反 袖 0) 下 岩場 筋 か 5 肉 俥 質 0) ようにごつごつ で引き締ま び る 0 腕 つ は 7 11 る 見 細 手

田さんは、 冗談 9 ぼく った。

戻

つたら、

つ

かり

顔を洗うとい

ていく。

そ んなに汚 なってる 0) わ た は顔を抑え、

恥ずかしくなって俯いた。

まり、 を下りた。 それから間もなく、 ハツ チが .開く。 わたしは少 リを乗せ た 俯 工 いたまま、 夕 が 1) 止

X X X

も無理はな 鏡 で自 分の いと思った。 顔と対面 わたしの 串田さん 顔 は が苦笑 煙突をく 41 す る

抜け たみた いにススで汚れて いた。

バスル

ームに入り、

タイ

ル

ブ

を

ひ

ると、 た。 何だか、 頭上のシャ お 風呂に入るのも久しぶりのように思え ワーヘッド ル壁についたバ から適温 のお 湯が降り

シ ヤワ ツ ドを手に取り、 全身をきれ 11 洗 11 流

だ。 怪 いけど、 我はない。 ところどころに小さなすり傷はあるも でもそれは、 単なる偶然じゃないから。 爆発の威力と規模から考えれ 幸運とは違う。 奇跡だったかもし 0 ば、 0 大きな 奇 跡的

な

間 ボディソー 指先を見つめた。 プを取ろうとのばした手を止め、

は だしっかり 先にその感触をたしかに感じていた。 れらが混ざり合う姿を捉え、 廻転 つきりと。 の瞬間、 ある。 わたしは全身に色とりどりの波と、 夢や幻だというには、 力を使った瞬 その あまりにも 余韻は、 間 0) 指 ま

じた今なら、 できた。 したものだという実感が、 偶然なんかじ エディプスに連れてこられたことも理解 や なくて、 たしかにあった。 わたしが自分の意志で起こ それを感

要なのだ。でも、 ミレイの言葉どおりなら、 エディ プス は、 今考えられるのは、そこまで。 この不思議な力を必要としてい この力は世界のた めに も必

からない。 わたしにはまだ、 どうしたいかは、 これからどうするべきかなん もっとわからない

たしの中にあった知らない自分を、 まだわた

受け止めきれずにいた。

ルブをひね

ŋ

シャ

ワー

を止めた。

もならない時は早く出てしまうに限る。 お 風呂は、 考えごとには最適の場所だけど、 そうじゃな どうに

きゃ、のぼせてしまうから。

気配 客室とし 最 たTシャ 用意されて 濡 は 限 n た髪を な 部屋は、 の家具があるだけ て使 制 ツだった。 服は わ 夕 いた着替えは、 才 れ エディ 今クリ ル ているらしく、 男物なのか、 で拭きながら、 プスの居住区画 Ó ーニングして エディ 殺風景な部屋だ。 誰 だぶだぶだ。 プス 脱 か が生活 0) いるそうだ。 衣所を出 0) 一角にある ロゴ して が入っ 普段は 汚 れ る

自 た 動開閉式の は、 濡 扉が れた髪を拭 ぷ く手を止めた。 ゆ 9 と音を立て 開

「これ、持ってきたの」

川さんは、

胸に抱えて

た

わ

た

0

制

服

式を

壁に 据え付けられ ニングの終わ 7 った服を届けにきてくれたら いる ハン ガ 1 フッ ク 13 かけ た。

るから」 少 座 一って話 しましょう。 でも淹れ

川さ を取り出す。 ツ プ ん は やティ キ 棚 ツ チ に常備され ン ツ グ 0) 戸 が置かれ 棚 7 か 5 いるら 7 1 いる。 ス 夕

たしの待 つテ ルに運んだ。

川さんは、

湯気

0

上がる一

0

マ グ

力

ツ

わ

どうぞ

け飲んで、 豆の量が少な 妙に味が薄 彼女は特に表情を変えない。 マグカ か いのだと思う。 つ た。 ップをテー 多分、 ブルに置 ちらりと外川さんを見る お 湯 わたしはもう一口だ の量 に対して使 た

「今日のことだけれど」

川さんが、

話を切り出した。

来事があったとはいえ、 「まず、 本当に申し訳なく思っているわ。 危険な目に遭わせてしまって」 予想外の 出

いえ・・・・・」

手を焼 だろう。 予想外の出来事と 普段からあんな調子なら、 いうの は ほとんどミレ 外川さんはひどく 1 が 原 因

あの、 今、 ミレイ は?

いているに違

いな

「まだ眠 ってるわ。 無理もな e V か なりエネル ギ

使ったから」

「ミレイは、 戦う姿が脳裏によみがえった。 耳の奥で、 あなたに何か話した?_ ライフ ル の重厚 な音がこだまし、

「それ は ゃ ガ わ たしは デンの中で起きていることについ 『選ばれた子ども』 だっ

₹ ::

「聞きました」

だったの。こんな形ではなくてね。 らえたことには違いない」 たちがあなたに知ってほ 「そう。 本当は、 もつ と順を追って説明する しいことを、 でも結果的に その目で見ても b 私

P ているはずよ。 ロフェトとしての力を必要として 一今すぐ、 外川さんは、 あなたは頭がいいから、 より詳しい説明が欲しいのならする 私たちエディ 力 ップをテー プスは、 肝心なことはもうわかっ ブルに置き、 いるの」 あなたの持つプ 話を続 も。 け で

ミレイの言葉が、 あたしたちしか、 頭の中で響 戦えな いた。 e V

「それじゃ、

やっぱり……」

コギトと戦ってほ ーそう、 私たちの最高の望みをいえば、 いい。 あれを倒すには、 彼 女と プロ 同 エ 1

の力が不可欠だから」

「でも……」

力があるない 0 問題じ つやない。 わ たしは、

は違う。 あ んなふうに覚悟を決めることはできな

それなしでは きっと戦えは な 41

でも、 戸惑うのは当然よ。 これだけ は わ か ってほ すぐ 決 め 11 られ これは絶対 なく 誰 \$ か

がやらなくちゃ できることじゃ な け な ことな \mathcal{O}_{\circ} そして、 誰

グカ わたしには、 ッ プ 0) 中に 視線を落とし 何 て言葉を返せば 11 11 か わ からず、 マ

発現 私たちは、 したばか ŋ 今 0) プ の結果にとて 口 フェ 1 の力を、 も驚 11 瞬 間 的 0) は

Ħ

る

ま

え、 からこんなふうには 可能性がある あなたは 使 5 わ。 な いかなかった。 そうでなく 7 た。 さも、 3 あなたに ですら 今 は は、 で 恐 最 ろ 初

7 プ 人たちを守るため 口 フ エ 1 が必要な 12 Ø) 壁の外で平穏に生きる、

わたしが…

だって、 だって、 わ わ た た は入野 は普通 マ まり

かけ 7 「葉が 止まる。

普通 0 何

0) 内 側に は 他 0) 誰 13 もな 11 力がある。

ろうか。 まだわたしは自分を「普通の女の子」だといえるのだ 要だなんていう。 いうあまりにスケールの大きなものを救うた そんなものを内側に秘めて いても、 めにも必

からわ

たしとミレイを守ったみたい

に、

類

思っ るのだろうか。そもそも、自分を普通の女の子だと るがした。 その思 ていることが、 (V は できないと思うことのほうが、 わたしという存在を根元 間違っていたのだろうか。 から大きく 間違って 揺

ろくに言葉も出てこない。 頭の中がぐにゃぐにゃと濁っていく。 答えどころ か、

ゆっ 「今日は、ここまでにしましょ くり考えてくれたら 11 <u>.</u> √√ う。 ۲ の話につい 7 は

ひどい顔をしていたのかもしれな ようなタイミングだった。 外川さんが話題を断ち切る。 わたし 救 61 は 11 0) 手を差し伸 自分で思うより ベ る

慣れ あなたの家じゃ、美味しいコ 着替えたら家まで送 な 人間が淹れた、 っていくわ。 味 の薄 ーヒー コ が飲めるでしょう。 ひ ヒー とまず休 とは違っ ん で。 7

外 川さんは真顔だったので、 それが 彼女の冗談だと

はすぐに気づけなかった。

その回りく شغ 41 人 間 くささが、 張 ŋ めたわた

心を少しだけ緩ませた。

× ×

着替え終わ ŋ 部屋を出て、 外 川さん 連れら n 駐車

場へと向かった。

駐車場に停まる 台 0 黒 0) S U 車。 そ の前 7

とりの男性が待っている。

彼は 串田サ 1 ル よ。 もう会 てるわよ ね

わたしが軽くおじぎすると、

「よろしく」

串 田さんは笑 1 黒 11 サン グラスをかけ た。 それが

よく 似合って 41 て ますますミュ ージシ ヤ ンみた

彼に家まで送らせるわ。 よろしく 串田くん」

「なあ、外川――

わずかに眉をひそめ、 外 川さん は 串田さんの言葉を

遮る。

何度も同じことをいわせない で。 私はあなたの 上司

なのよ」

口調こそ冷静だけど、 外川さんが苛ついていること

はわたしにもわかった。

それでも相変わらず、 軽薄な笑顔を崩さずに串田さ

んが、

堅いこというなって。 そのへんは、 俺とお前の

「私とあなたの?」

仲…」

ふうん、 それは一体、 どんな仲か しら

ギロリと、 睨みをきかせる外川さん。さすがに串田

さんも察して、 表情が凍りついた。

「……上司と部下です」

「次やったら減俸だから」

「はい……」

いたずらを飼い主にこっぴどく叱られる犬のようだ。 沈んだ表情で、 串田さんは首をすくめた。 さながら、

「それで、用は何かしら?」

外川さんは呆れた様子で、 話題を持ち直

た。

ああ、それだが……本当に来なくていい のか?」

そう訊かれた外川さんは、 瞬、 躊躇する。しか

すぐに持ち直し、返答した。

仕事が山積みなの。 ・ええ、 私は 11 けな 茅野さんには、 (V わ。 やらなければならない よろしく伝えてお

いて

「わかったよ」

串田さんは肩をすくめて返答した。 すると、

わたしを見て、

「それじゃあ、いこうか」

串田さんが助手席のドアを開く。 わたしは招かれる

ままに、乗り込んだ。

ド アを閉め、 シートベルトに手をかけ たとき、 フ 口

トガラスに何かがする っと滑り降りた。

だ、 もう見間違い い毛並みに、 赤い瞳。 はしない。 そ れを目にするのも三回目

「あらし!」

たかのように、 わたしは、 車のドアを開けて飛び出 あらしは胸に飛び込んでくる。 した。 待っ

のように軽い身体を受け止 め 極上のカーペットみた その羽

いな毛並みを指先で撫でた。

「驚いたな、どっから沸いた」

串田さんは、 サングラスをずらして、 あらしを不思

議そうに見つめた。

わたしは、 あらしを胸に抱きながら、 周 囲を見渡す。

きっといるはずの、 彼女の姿を探した。

「マナ」

さっき通ってきた出入り のほうから、 その呼び

がした。

ミレイ!」

てくる。足取りはゆっくりとしていて、 白衣を着た女性を連れて、 ミレイがこちらへ向 表情はまだ、 かっ

眠そうだ。

「もう起きて大丈夫なの?」

外川さんは、 ミレイにではなく、 白衣の女性に尋ね

た。

「すみません、 :どうしても見送りにいくって聞かなくて」 寝てなきゃダメだとい ったん ですが

白衣の女性は、 困り果てた様子で外川さんに説明す

る。

外川さんの声には、 怒気が込もっている。

大丈夫よ、 そもそも何でもないんだし。 ほら、 元気

元気」

ミレイは力こぶを作るような仕草で、 完全健康体を

そ の腕は やっ りどう見ても細く 盛り 上がるほど

の筋肉も な · 1

仕方な (V 間だけよ。 戻 つ たらきちんと

休みなさ

は 隊長」

わたしの腕から、 レイはにへらと笑って、 ふざけた敬礼をする。

あらしが離れる。

そこが指定席だ

といわんばかりに、 ミレイの肩へと移った。

「わざわざ見送りなんて、 別によかっ たのにし 嫌だったんだも

だって。 寝てる間にいなくなるの、

「そっか。 ミレイ はにこりと微笑んだ。 ありがとう」

ミレイに振り回されて、 ひどい __ 日だっ た。 そ れ

のに、 自分でもよくわからないけど、 不思議と素直にお礼の言葉が出てくる。 ここを出る前にもう 理由 は

度会えたのがうれしかった。

とあんたが初めて会った時の、 「そういえばさ、 アイツ、 元気かな あの男の子 ほ ら あ

一ああ、 うん。 おかげで怪我ひとつなかったし あ

が新聞沙汰になっ んで、 のあと、 わ たしがあの子助けたことになって、 結構大変だ たりして 9 た んだよ? いろいろ…… 近所 0 人が警察呼 それ

何それ

こんないびつな出会いでな ミレイは笑う。 つられ 7 かったら、 わ たしも笑う。 わたし たち

関係はどんなものになっていただろう。 友達にはなれ

ただろうか。 いい友達になれただろうか。

「マナ、 外で力使っちゃダメだからね

あんなの、 やろうとしたってできないよ」

できたらもう二度と使いたくない

そう

それに、

力は したから。 いかけたけど、声に出すのはやめた。 わ た しとミレイを繋ぐものでもあるような気が プ 口 フェトの

再び助手席に 乗り込むと、 黙 9 7 待っ た

串 田さんがエ ンジンを回した。

に合わせ、 窓越 しに、 3 っぽを振った。 レイが小さく手を振る。 あらしもそれ

それじゃ、 また ね

あ、 うん。 また……

反射的に、 そう応えてしまう。

た 「また」っていうのは、 手を振り返しながら、 は本当にあるのだろうか。 自分の言葉に引っかかる。 いつのことなんだろう。 わたしがここに来なけ ま

れば、きっと二度目はない。 わたしは街に帰る。その街で生きてくってことは

ミレイとは違う世界で生きるっていうことだから。 そう思ったら、とっさにわたしは言葉を発していた。

「ねえ、 ミレイ。 もしも、 今度宇田川に来たらさ

ミレイは、 手を振るのをやめて、 きょとんとした表

情になる。

「よかったら、 少し間があってから、 うちに来て。 ミレイは無邪気に笑った。 いつでも待ってるから」

「うん。絶対いく」

た。 そうして、 車の窓を閉め、 今度こそ本当にお別 n

イドミラーから覗いていた。

遠くなって

いくミレイの姿を、

見えなくなるまでサ

そうしていると、 意識 0 中 からこの場所のすべてが

遠のいていくようだった。

最初で最後かもしれない宇田川の秘密の景色は、 遠

ざか る自分の姿を想像できなか わ た れば遠ざかるほど、 は、 夢か嘘みたいなこの場所に、 そ った。 の現実感を失っ 7 二度目に来 41

CHAPTER=2

た。 続 識 走 は、 エディ っていくと、 ていた。 わ たしの家までさほど遠くないことを示して プス の施設からは地下トンネルが壁の トンネルを抜けた先の林道をしばら やがて一般の道路に合流した。 道路標 外まで

「道、調べたんですか?」

串田さんは 地 図もナビも見ていないので、 わたし

疑問に思って訊いた。

「ああ。 ン ド bルを左に切って、 っと他のことも知 串田さんは得意げに話をつ ってるよ。 例えば

づける。

学出身で、 君 0 の店主で、 保護者にあたる茅野ト 現在二五歳。 世界のあちこちを回っては珍妙な品 古道具屋兼カフェ 力 は 君 同 リゴ 柄 崎 ラ 中

解?:_ 弾けないピアノを弾こうとする。 好きで、 世界を股にかけほとんど家にはいない奇人だっ を仕入れてくる変わり者だ。 プライ トピアノがあるのは、そのためだ。 酔うとグレングールドの その父、 店の片隅に古い レコードをかけるか、 茅野タ ツオミも、 た。 7 正 ツ 酒

れているなんて。 わたしは、 ぽ か んとした。 そんなことまで全部 知 6

悪 い悪 11 種明かしをするよ」

笑 つった。 串田さんは、 化かされたようなわたしの 顔を見て

んだ」 知ってる。 「本当は、 実は 別に調べたわけ 俺と茅野ト Ú ゃないんだ。 カは 中学の 全部元 同級生な から

「えつ?」

思いがけない告白に、

鷩

いてしまう。

たし

か に、

カさんと同じくらい の年齢には見えるけど、

か 同級生だったなんて。

の家の子になるよりも前の話だ」 昔は、 ってた。 それなりに仲もよくてね。 親父さんにも構ってもらってたよ。 あ 0) 店 13 君があ もよ

「そうなんですか」

俺のほうが部下になっちまってるから、 「ついでにいうと、 外川キナミもそうだ。 もう同級生気 まあ今は

分じゃないけど……」

なった。 串田さんはバツの悪い感じで、 口 .調が 渋く、 重く

こまで意外には思わな 外川さんとトーカさんが同級生だということは 61 む しろ、 二人の見知った様

「全然、知らなかったです」

子に説明がついた気がした。

野にもしばらく会ってない。 仕方ないさ。 君の家にはずいぶんい 今日会うのも中学卒業以 ってない

来だから……一○年ぶりくらいになるな」

「でも、それならきっと、 すごく仲よかったんですね。

トーカさんと外川さん」

どうしてそう思う?

外川さん、 笑ってました。 ほ ん のちょ っとだけど、

トーカさんの話をする時だけ」

笑 った? 君の前で? へえ:

串田さんは、 感心した様子だった。

会わなくなっちゃったんですか?」

時期を過ぎたら、 くなったりする。 いだよ。 いつまで友達を友達と呼べるのかは、 | さあ… ずっと一緒に過ごしてきた相手でも、 :何でだろうね。それは、 まるで最初から他人だったように遠 この歳になると、 よくあることさ。 俺が聞きたい 俺もよくわから あ る 一

落ちていた。 さに顔を背けて、 その言葉には、 串田さんはそれをごまかすように、 悲しさや寂しさとは違う種類 ハンドルを右に切った。 の影が

あれ、 めた。 「そういえば、 しばらく会話が途切れ、 少しずつ、 君も弾けるの? タツオミさんが弾いてた曲あったろ。 見覚えある街並みが現れ 何てタイトルだったけな、 わたしは窓の外の景色を眺 はじめた。 Ž

た。 串田さんは、 思 41 出せない様子で眉間 13 わを寄せ

えと・・・・・」

「え、そうなんだ?」 あのピアノ、 今 はもう弾けないんです」

ひどい調子はずれになっちゃって」 なって。それで、 おじさんが死んじゃったら、 しばらくほったらかしにしてたら、 誰 も弾く 人が QUE:03 そのまちで / Butterfly friends.

こうやって、 一そうなの か。 気がつ ゃ つぱり、 いたら歳食ってんのかな。 時 間は経 つもん なんだな。 あ っと

いう間に俺もオッサンか_

車 ま は ったな、 宇田川で一番大きな幹線道路、 という様子で、 串田さんは苦笑いする。 二号線に入る。

わたしの家は、 もうすぐだ。

X X X

家が近くなってくると、 陽も落ちて、 あたりはすっかり暗くなっ なぜか少しずつ気持ちがそ 7 (V る。

わそわし始めた。

長く、 離れていたのは 家に帰ってきていない気がする。 数日 0 はずだけ بخ もうず いぶ んと

二号線から脇道に入り、 坂道を登って 61

斜 面

立ち並ぶ家、 切ったところに、 狭 い道。それらを抜けて、 わたしの家はある。 坂を上が

到着だ」

リゴラン ドの看板が立てつけられた庭に、 車を停

めた。

店の入り口に、 人が立っているのが見えた。 顔を見

たくてたまらなかった人だ。

車を降り、 砂利道を進んだ。 足取りは思わず、 駆け

足になった。

トーカさんの下に辿り着くなり、 思わず抱きついて

しまった。

「……ただいま」「おかえり、マナ」

温かさに、一気に安堵感が溢れ出してきて、 気を抜

いたら泣いてしまいそうだ。

「あら、この甘えん坊は、 どこのお子さんかしら」

「もう、うるさいなあ」

からかう声に、むくれて応える。

「久しぶりだな、茅野」

あとから来た串田さんが、 トーカさんに声をかける。

······うん。 元気だった、 串田くん」

てさ。 仕事が山積みなんだそうだ。 なんとかやってる。 今 日、 外川は来られないっ よろしく伝えてく

れといっていたよ」

「そう。 それじゃ、 私もキナミに伝言お願 41 してい

٦ ١

「なんなりと」

QUE:03 そのまちで / Butterfly friends.

苦いコ でも ヒー でも飲みに来て (V 11 か 山積み 0 仕事が終わ

たら、

そういうと、 二人の間にわずかな沈黙が生まれた。

かっ

た。

伝えるよ、

必ず

…それじゃ、 俺はもういかなきゃ

悪いな、 店、 さっさと帰んないと。 寄ってきなよ。 お茶くらい出すわよ ち んたらしてると怒

られちまうんだ、 外川課長殿にね」

てるわけだ。 串田くん、 キナミ それって、 の部下なの すっごい笑える ? あごでこき使わ

うなんだぞ。 「うるせえなあ。 あいつの出世が早すぎんだよ」 いっとくが、 これでも俺は優秀なほ

間の二人は、 くすくすと、 <u>と</u> ちゃんと友達同士に見えた。 人は笑い合った。 少なく

゙それじゃ、 またい つでも来て」

ああ、そうする」 串 田さんは、 車へと戻 つ 7 乗り込む間 際

を振 ったので、 わたしは会釈して返した。

互 なの 間に感じる微妙な気遣 か、 ○年ぶりの再会はあ 〇年の年月が広げた距離なの いは、 っけなく終わ 単 に緊張してい かは、

自

分

か

け

あれ・・・・

あることを思い出して、

慌てて日付を確認する。

わ

QUE:03 そのまちで / Butterfly friends. 替える。 屋に 入れた。 わた 気持ちで、 0 「うん」 「さて。 ダ 部屋をやけに新鮮に思う。 不思議な気分だ。 口 制服をク 戻った。 にはわ ーカさんは しはやっ カさ] に目が向 それじ ゼッ マナ、 しわにならないようきれい X … そういえば」 $\bar{\lambda}$ か 部屋を見回 と長 らな ローゼットに入れる。 が食事を作っ お腹へ から適当な部屋着を や 店の入 入 か W しばらくいなか 9 X た た。 日を終えたような心地になる。 ってない? ŋ 走り去っ 口を開け ふと、 た ブラン れて X クを埋 7 引 壁にかかったカレ いる つ 何か作ろうか」 た 41 張 間、 せ わたし く車を見て、 ガ ŋ めるような 41 か 自分の

部

は、 今日が何日か、 すぐにわ からな か った。

に学校にい エディ プスに た いた から計算すると……。 のは三日 間。 過ぎた日数を、

最後

…最悪だ」

9

日

がそいわ 日だなんて。 は、 愕然と た。 まさか、 より て今日

間 違 どう計算しても、 いがな Ŋ か もう 今日は 回 力 レン 五月一五 ダ 一日だ。 を見て みる。

呼ぶ声がした。 にカレンダ そのうちに、 ーを何回も見返した。 わたしは返事をして、 階下からトー カさんがわたしの そんなことしても無 悪あがきのよう 名前を

もう一度「… :最悪だ」とため息をつ e V 重た

足取りで部屋を出た。

駄だってわかっては

いるけど。

立っ どういうわけ たおかげで、 し込む月と街の灯りがあって、 階 ていることはわかった。 の廊下を進み、 か中は電気が消えていた。 かろうじてカウンター お店 へ繋がるド 完全な暗闇ではな ア 窓 を の外 開 カさんが け から差 る か

…何してるの、 1 カさん

答えの代わりに、 ぽ と灯りがひとつ、

一マナ」

んの手元に宿った。

ろうそくの火だ。

カウンターの中に立つト カさんが、 ささやくよう

な声と一緒に手招きする。

を持っていた。そこに立てられた、 ーカさんは、わたしの好きなチョコレート 一本きりのろうそ

「これって……」

ーマナ、 誕生日おめでとう」

今は、 んだ。 さっきまでの重たい気持ちが、うそみたいに吹っ飛 胸が躍るって言葉がぴったりなほど、 わたしって、単純なのかもしれない。 とにかく 心がは

「覚えててくれたんだ!」

しゃいだ。

当たり前でしょ。さあさあ、 消して」

わたしは深く息を吸い込んで、ろうそくに吹きかけ

た。

する。 11 火がひ 最悪と最高が、 日。 わたしの ゆ っと消えて、ぱちぱちとトーカさんが拍手 四歳は、 日の中で行き来する、とんでもな これ以上ないくらいに、

は W これ

食事を終えてコー ヒーを飲んでい るところに、

カさんが二つの紙袋を差し出した。

それぞれに赤と青の、 小さなリボン が つ け られ

る。 不意のプレゼントに、 気持ちが高鳴っ た。

「それは、 あおいちゃんとスズカちゃんからよ」

いた袋を開けた。 わくわくしながら、 わたしはまず、 青いリボン 0

入っていたのは、 映画 DVDだ た。

0)

つ

夕

は

マンチャーデッドの夜』。 一九九九年・オランダ製作

観たことのない 映画だったけど、 パ ッケー ジ からス

プラッタもののゾ ンビ映画であることは間違いな

何コレ……」

あら、 オラン ダ 産 のホラー なんて、 若 61 0) 13 13 13

ンスしてるわね

カさんは、 感心 したように 41 9 た。

だ。 ちなみに、わたしはホラーとスプラッタが大の苦手 スズカは知っているはずなのに。

QUE:03 そのまちで / Butterfly friends.

ういってたわよ」 『それ観て、 こんなもの観たら、 元気だせ!』 逆にげ って、 んなり スズカちゃ しまいそうだ。 ん、 そ

から、 日だからってプレゼントも持ってきてくれた せて寝込んでたってことで学校には説明したのよ。 あなたがしばらく学校を休んだこと、 元気出せ? 二人ともお見舞いに来てくれて、 何で、 そんなこと」 それで、 風邪をこじ 0) 誕生

る」って。 さんもい 学校や周囲に対して、 カさんが本当の理由を知っているからだ。 0 ていた。 ŀ そんな対応ができる カさんは「すべてわ か 0) 外 は 7

一ねえ、 カさん は、 わ たし がプ 口 フ エ **|**

知ってたの?」

カさんは、 静かに 頷

まるでないくらい、 「……可能性があることはわ 低い可能性だったけ か っていた れ ど 」 わ。 現実味が

うことを証明していた。 カさんが本当に「すべて」を知っているんだとい 口 フ エ ト」という言葉が通じている。 それ は

知ってるならどうして、 教えてくれなか ったの?」

ね

あお

どうしていいかわからなか 秘密にしてくれていたことは伝わったからだ。 か フ レゼン 赤 った。 エ わ 無理に 卜 たしは、 カさんだって迷っていたんだと思う。 あなたには、 いリボン でな トだ。 } 知る必要はないと思っ いなら、 0) カさんがわたしのことを考えて、 それ以上問いつめるようなことは 袋を手に取 普通に生活してほ そんな可能性の話、 った。 った 0) た あお と同じように。 Ø) しかったから いちゃ あなたが 知る必要は わた λ 今まで それに、 か プ ら が な 口

を開けると、 作りされたものだ。 青 赤と白と紺の三色のライン いリボン 中にはミサンガが入 のほうよりもず 袋の奥には、 にな いぶ ん つ っていた。 メッセ 7 小さく て、 軽 カー 11 寧 そ 0 袋

悪の誕生日を迎えて ていた。 文の冒頭は、 いるマナへ』。 こう書 いてある。 『多分最

ま 全部 か迷ったけど、 マ ナ、 0) 部員証みたいなものだね。 誕生日おめでとう。 わたしとスズカ用も一 あんまりお金もないし、 プ 緒 レゼ 早く元気になって 作ったから、 1 結局こ 何 n 実質、 13

そして、

ゆっくりと弾き始めた。

調子はずれの音な

ンガを右手に巻いた。 わ たしは早速、 1 カさんに手伝 最悪な誕生日だけど、 ってもらっ そのプ てミサ

ゼントは最高だった。

一人とも。 「あなたが病気だって聞 うそついて追い返すの、 e V て、すごい心 心苦 配 しいくら してた 0) ょ

⁻うん。ちゃんとお礼いわなきゃ……」

すると、 うれしくて、 トーカさんが咳払いする。 わたしはそのミサン ガを眺め 7 た。

「まぶしい友情のあとでは、 少し出 づら 11 け

私からもプレゼントがあるの」

「ほんと?」

喜んで食いつくと、 店の奥へと歩いていく。 <u>ا</u> カさんはカウンターから出

なった、 そして、 壁際で立ち止まる。 今ではもう弾け

なく

古いアップライトピアノがそこにはある。

ーカさんは、おもむろにピアノの前に座って、

ばらく動かされていなかった鍵盤のふたを上げた。

んかじゃなく、 きれ いな旋律をピアノ は奏でた。

「**それ**! 直ったの?」

「 うん。 直した。 こんなのでプレゼントといえるほど

0 ものかどうか、 わからないけれど」

わたしがピア に歩み寄ると、 トーカさんは 席を

譲 ってくれた。

さんが、 は 一度もない。 鍵盤に指をおいた。 譜面も読めない。 へたくそに、 だから、 でも気ままに弾く姿を、 わたしは、 教室で習うような曲は弾けな でも、音が好きだった。 ピアノを習 ったこと 後ろか おじ

ら見ているのが好きだった。 適当に鍵盤を押した。 ポーンと、 軽やかに音は宙を

舞って、店の中に響いた。 曲ですらないただの音でも、

心の底から気持ちよかった。

「トーカさん、 ありがとう。 すごくうれし (V

ーカさんは、 黙ってわたしの頭を撫でる。

ピアノの調子が悪くなって、 弾けなくなったことが、

本当は寂しかった。

でもト の音色がおじさんの想い出をよみがえらせ、 ーカさんに一度もそれをいったことは な 11 そ

0

れはトー カさんにとって辛いことなんじゃないかと

思っていたのだ。

知っていた。 でも結局、 トーカさんには、 そうやって我慢していたことも、 心の中まで見透されて 全部

られる。 いるみた 41 だ。 わ た 0) 隠 しごとなんて、 すぐに見破

ねえ、 ケ キ食べよ」

「そうね」

そうして、 ピア) のふ たを閉じた。 れ からもこの

ここにあるのだ。

階にある しはお店のほうへと戻っ 1 カさんの 部屋から毛布を た。 枚取っ

ワインのボ 久しぶりだと思う。 ているけど、 毛布をかけてあげた。 ファでひどくだらしない格好で寝入る トルが転がっている。お酒好きな こんなになるまで飲んだのは、 これじゃ、 テー ブルには、 一体どっちの誕生日だ 空に 1 ず Ō) な は カさん ž 知 9

わ 外の空気を吸 からない。 いたくなっ て、 庭に 出 た。

がほとんど一望できる。 の家は高台に建っているので眺 夜に浮かぶ街 め がよく、 の灯りは、 宇 地上 田

プラネタリ そして、 夜のテラスはその景色をひとりじめにで ウムが現れたようで、 きらきらとまぶ

わたしの特等席だった。

入れると、 ポケット いて、 メールや着信がかなりたまっている。 から携帯を取り出した。 久しぶりに電源を 履歴

電話をかけ直すことにした。

もう夜の

を開

時を回っていたので少しためらったけど、 電話をしておいたほうがい いと思った。 なるべく早

あ、 もしもし、 あおいちゃん?」

マナ!

電話越しに、 あおいちゃんの声が弾んだ。

「大丈夫なの?」

うん、 もう大丈夫。 あり がとね、 お見舞

レゼント」

を照らしていた。 空に右手をかざしていった。 月明かりが、 ミサンガ

ないかと……」 もう、心配したよー。 っていわれちゃうし。 なんか、 家にいっても、 すごい病気なんじゃ 全然会えな

「ごめん。 もう大丈夫だから。 明日から学校にも

「よかった。 スズカも心配 してたよ_

えー・・・・それなのに、 ゾンビ映画?」

「やめとけっていったのに、 本当にあれに したんだ

:

呆れた様子で、 あおいちゃんがつ づ ける

一まあ、 スズカの悪ふざけは愛情表現の裏返しだか

ら

「知ってる。 でも、 さすがにあ 0) 映 画 は 観な 11 か な

:

あの血みどろのパ ッケージ写真を思い 出 ただけで

胸焼けがしてくる。

「スズカにはもう電話

「ううん。 今日はしないつもり。 不意打ちで明日学校

した?

にいって、 驚かせてみようかなって。 どんな顔するか

なあ」

「きっと、 驚くと思うよ。 マナが学校こなくなって、

番そわそわしてたのスズカだから」

「そうなの?」

「うん。ミサンガだって、 作ろうってい 41 出し

スズカなんだよ」

「そっか。それじゃ、 ますます明日が楽しみ」

スズカの驚く顔を想像して、 二人でくすくす笑い

合った。

遠くを眺める視線が、 静かな夜の宇田川の景色の中

け

残っ

て

いた。

13 妖 1 ア ツ プされる場所に 向 た。

は、 と同 とを許してくれな 照明が当てられていて、 宇 その内側を知ってしまったから。 じように単なる景色では 田 川を象徴する、 い。その見 巨大な壁が並ぶ 片時もその な 慣れた光景は Ž なっ 存在を忘れ 光 7 景 た。 夜 もう以 間 わ も常 る 前

野マナになる前 そこにはミレイが 0 本当のわたしが。 いた。 そして、 わ た が 41

生まれた日じゃ たいと思っても、 マナ」という新しい名前が、 今日は 入野マナの誕生日だ。 な 6 どうすることもできなか 本当の名前や生まれた日を 戸籍に登録された日 でもそれは、 0 た。 で 知 野

いや 野マナとしての自分がたしかなも でいき、 だからわたしは、 て思うことで、 ってきた。 時 間 ただ、 が過ぎる中で、 大人になって自分の世界が 早く大人になりたいという気持ちだ 本当の自分のことは心の片隅 入野マナが、 そんな思 わたしのすべ のに は 少 なると思 できれ しずつ薄ら 7 ば へ追 な 9 た。

0 自分の存在を。 でも、 今日また、 よりにもよ わ た 認識 9 て、 7 マ ナの誕生日 しま 0 た。 本当

わたしの心は、 ぐらぐら揺れていた。

「マナ、どうかした?」

・・・・・・あ、ごめん。 何でもないよ。 それじ や、

ろそろ切るね」

「うん。それじゃ、 また明日。 おやすみ」

電話を切った。そのままポケットにしまおうとし

手が止まる。

メールボックスから、 一通のメー ルを開いた。

『人類とか、救ってみない?』

このメールにあんな意味があったなんて、 思 (V

なかった。

仰向けに寝そべり、 星がちらちらと輝く空を見上げ

たら、ため息が漏れた。

どうして、わたしなんだろう。

CHAPTER=3

朝ごはんを食べて、身支度して家を出たら、 た道を辿って学校へと向かう。そのゆるやかな朝の風 目覚めて、 いつもと変わりのない 朝がやってきた。 通い慣れ

景は、 四歳になったって、 人類を救っ た。 たって、 別に

代わり映えするようなこともなかっ あえていうなら、 久しぶりの通学路が少 新鮮

思

えたことくらいだ。

から、 姿を見つけた。 かない。 校門の少し手前で、 こうして二人の背中を見るというのは、 いつもなら、 スズカとあお わたしもそこにいる。 いちゃ ん 0) ź なかな

人の肩を、 わたしは、 バレないようにそ つんつんと突いた。 0 と近づき、 背後、 から

を丸くした。 二人は同時に振り返って、 特にスズカは、 冷や水でもかけられたよ わたしだと気づく な

うな驚きぶりだ。 マナ!」

期待を裏切らな 61 そ の反応 わ た は思わずに

まりしてしまう。

おはよ、

二人とも」

おはよ、 じゃないわよ、 あんた」

スズカは、 呆れたようには っと息をつ 41

じゃったかと思ったじゃん」 もう、 電話もメールも返 てこないから、 死 ん

ったしま、笑って反「そんな、大げさだよ」

多分、 わたしは、 本当にそれくらい心配してくれていたのだと思 笑って返した。 言葉は冗談じみて r V 7 \$

う。

「でもごめんね。心配かけて」

いいよい いよ、 元気ならそれで」

今度は、 あおいちゃんがわたしに笑い かけ

「あと、それから……」

まで上げた。手首には、 わたしはそういって、 あのミサンガが結んである。 右手を二人によく見える高さ

「これ、 ありがとう。 おかげで元気出たよ

「大事にしてよ。作るの結構大変だったんだから」 ふふん、 とスズカが鼻を鳴らす。 すると、 あお

ちゃんが呆れ返って、

「なにいってるの、 作ったのほとんどわたしじ ゃ な

 \vdots

細か ことは 11 41 っこなしでしょ、 あ お

いると、 その、 少しずつ、 いつもと変わらない二人 わたしの日常が息を吹き返して の掛け合 11 0) 最中に

くようだった。

「そうだ、 映画は観た? あたし からの、 渾身のオス

スメの 作

目を輝かせて訊くスズカ。 ッケージを思い出しながら、 わたしは、 適当に笑っておく。 あ のおぞまし

多分、 引きつっているとは思うけど。

一まあ、 あれは気が向いたときに…

何、 体調悪 まだ観てないの? い時に、 あんなの観られるわけないでしょ 傑作なのに、 あ n

ない。 もちろん、 元気な時に観れば平気、 と いうわけ でも

のない話をしながら、 61 つもの感覚を取り戻すみた 学校へ向けて歩き出した。 いに、 だらだらと他愛

あ、 ねえ、 マナ。これ、よかったら使って」

教室に到着して席に座ると、

斜め前の席の

あ

お

ちゃんが、 カバンから数枚のプリントを取って、 差し

出した。

「なに?」

たから、 マナが休んでた間 授業ついてくの大変かなと思って。 0) 授業の 何日も休んで

取ってきた_

あ りがとう すごく 助かる

بخ

領が 間 てその点数だっていうのに、 わたしと大して変わらな の半分くらい寝ているっていうのに、 す 当然授業は先に進ん っかり忘れて 全然つ ほう いたけ 7 な いので、 けな でい , , 41 るのだ。 なんか不公平だ。 わたしは ちゃんと追 何日も学校 スズカなん テス 勉強 一生懸命 いか で休 **|** て、 0 関 $\ddot{\lambda}$ け 点数 勉強 授業 7 は 中 か る

た。 時、 机 バンから出 の中にもプリン たノ 1 が入れられているのに気づ トや教科書をしまおうとし

取 り出 小テスト してみると、 0) プリン 1 わ たしが休 だった。 ん で e V る 間 の学内

゙あれ、これ

「ひかりのまち」 その中から一 枚、 開催のお知らせ』 目につ いたチラシを手に 取 0 た。

何見てるの、 その見出しの下 マナ」 に、 日時や場所などが記され 61

る。

わたしは、 あ おいちゃんが、 そのチラシを彼女に向 わ た 0) 様 子 けて、 気づ 11 訊

「これ。 もうそんな時期なんだね」

「そうだね。今年もいく?」

今年もっていうか、 去年は結 局 行 け な か た

「そういえば、そっか……」

う、 インとなるイベントだ。 がやってくる。 とても幻想的で、 灯籠が流れるのだ。 が行われる。 灯籠流しの行事だ。 『二島祈念日』であり、 ひかりのまち』というのは、 五月二五日は、 一本の大きな川が流れている。 一年で一番、 祈念式典と合わせて、 毎年、 二島事件の犠牲者に祈りを捧 夜の 海が近い宇田 宇田川では式典や慰霊祭 川に灯籠の光が浮かぶ景色は 県内外からたくさんの見物客 この街に人が集まる その中 川には、 そこへ の催 二島祈念日 細さし 野のの 何 百も Ш ひとつ、 日だ。 な げ と X

感覚でもあるのだ。 店も出るので、 その夜は、 『ひかりのまち』 わたしたちにとってはお祭りみた に合わせたくさん 0 な

に、 キを巻いた、 かけるハメになってしまったからだ。 去年いきそこなっ スズカが 妙な一団を発見してしまい 「 お い た でませUFO』 0) は 灯籠流し 書 0 会場に着 か れた それを追っ チ 前

宇田 祭り 夕 で もあるら だに多く の は 日な オカルトファン のだそうだ。 の謎を残す二 五月二 0) 島事件、 <u>Ŧ</u>. 日 人たちにとっ は彼らにとって そして て定番 不 可 解 0 のネ な 一お 街

では 誌や深夜のテ 慰霊 宇田 や祈念 沠 レビ番組などが乱発され の心霊話や都市 のムードに包まれ 伝説を る 扱 般 る。 9 0 たオカ び ル 0 1 ウ

なオ のだという。 そして、 カルト フ 二島祈念日当日ともなると、 ア ン が集まり、 宇田 Ш に押し寄せてくる 全国 か ら 熱心

灯籠流 カは、 初から あ を取り る気配などなくて、そのあとみんなでお酒を飲みにい ことが、 ち つさりと解散 で行進 った結果どうなったかというと、 なみに、 「何だよ、 け 用意してあったような台詞を口々につぶや 囲んでマスゲームみたいなダンスを三○分く しを見そこねたわたしとあおいちゃんこそ たのち、 して河原に 彼らのメインイベン ぉ した。 ただの茶番かよ!」と怒っていたが、 61 「ああ今年もだめですね」 ついたかと思うと、 でませU もちろんUFOなどお F O 1 だったら 彼らは二〇人く 0) 团 ろうそく 体 などと に 61 で つ なさ スズ 41 11 一何 て、

X

X

X

だよ !」という気分だっ た。 実際に は 疲 れ果てて怒

る気力すら残っていなかった のだけ

一今年はさ、 おいちゃんが、 浴衣着ようよ」 思いつ いた様子でい

た気分になって、 りがあるころに着ればいい話なのかもしれな **『ひかりのまち』** 浴衣かあ: あ やっぱり、 着たい、という気持ちはあった。 で浴衣姿の人に出くわすと、 去年は、 いつも 「着ればよか まだ涼しか 9 ったな」 たもん いけ と思 損をし ね 夏祭 څک

暑くなるとい いなあ・ てしまうのだ。

るなんて思 れた空だった。 つない快晴だ。 わたしは、 かり ぼんやりと窓の外に目をや これから春が終わ ていないような、 って梅雨がやっ そんなからっと晴 0 た。 雲 てく ひと

い返す。 「今年は、 んな気がしていた。 あお いちゃ なんの根拠もないけど、 去年より暑くなるんじ んが った。 わた は や わたしもなんだか、 ない その か な、 目を見て笑 多分」

ん で る 間 思 た ょ ŋ b 授業は

先

進 追 か け る 0 が た。

₽ な 0 あ お 0 7 0 学校 お ち しま か ゃ が げ L が 終わるころに て で 41 た。 な わ ん た そ か 0 な てスズ つ ると、 め 13 7 力 取 は だ ってく ことが (V Š 今日 へと n b で 授 き 13

時 授業 間 中 半 た 机 13 伏せ と力を蓄えたス つ 7 いた。 不公平だ。 が 部 活

9

Š

ŋ

ズ

力

で

横 近 でお 何 死だ 8 か 今 暴 マ H れだす や 9 た 7 0 お ŋ 放 e V 課 る か ん 後は げ じ てるだけ 口 で、 や 穏 な ル ブ Þ わ 11 で よ かと心 た レ か イン なも か とあ グ のだ 配 9 た お ゲ T 11 つ (ただゲ ちゃ た。 11 ムを進め たけ L ス ズ شط は そ る 力 ム が 意

ただ け な具合に って 久 部活と しぶ てどう の学校を終え、 かと は思うけども 家に たど

ŋ

ŋ

そ

h

た。 B た 外 うだ。 7 閉ま から見 いな つ 0 た 店 7 先の看板 営業中なら IJ た。 ゴ ラン 今日、 13 F B 開 には け 準備中』 IJ 放た 人気がな ゴ ラン n 7 ド 0) 11 る が 店 店 明 か

か 7

わたしは学校から帰っ と知ることも少なくな んと店が続 びたびト いているのが、 ーカさん てきて、 0) 41 0 都合で店休になるも 不思議でしょうがな こんな気まぐれ営業でち その日店が休みだ 0) だ か つ た ら、

あれ?

鍵が ド 開 アに手をか いたままだ。 け 7 お か しなことに気づ e V 家 0)

る。 ないから、 たんだろうか。 れないけど、 こういう時はたい 今だって、 出かけ それにしても不用心だ。 そりゃうちに盗るもの 庭の駐車ス ているのだと思う。 7 41 ペースにトー 1 カさんも家を空け な 戸締まりを忘れ カさんの車 んてない か 7 は

いた。 に溜ま 店 の奥にある家の入り口に向か った洗 い物がほっ たらかしにしてあるのに っていると、 キ ツ

もう:

は 物を片付けてしまうことにした。 わたしは、 そのままにしておくわけ その辺りにカ バンをほ には 見 か つ ぽ つけ ŋ 7 出 しまっ 7

e V

な

11

上 部 手早く洗 の食器棚に上げたその時、 いものを済まし、 最後の ちょうど表から、 力 ツ プをキッ 車の チン

型 音が聞こえてきた。 の車だから、 エンジン音が最近の車とは全然違う。 マ スタン グのエン ジン音だ。 古

いる音だから、 てんで車には詳しくないけど、 染み付いているのだ。 昔からずっと聞

「ただいま」

間もなく、 1] カさんが店に入っ てきた。

カさん。 鍵、 開きっぱなしだったよ」

ごめん。 すぐ帰ってくるつもりだったから」

…ていうか、 何、 その荷物?!

には、 ーカさんは、 子どもが書いたような字で 大きな段ボール箱を抱えてい 「いるもの」 と書か た。 箱

れている。

「ああ、これはね」

ーカさんは 適当な場所 に箱を置 てから、

一度ドアを開けた。

彼女を迎えにいって そうして微笑む意味がわ 41 た 0) からな いで いると、 開 11

ドアの隙間から、 ひ ゆ 9 と何かが飛び込んできた。

空中で軽やかに 回転、 そ してそのままふわふわと

浮かぶ、赤い瞳の白い動物。

それ から、 続けて彼女が入っ てきた。 デ 4 0

い最近会ったの 日 ツに大きめ に、 ずいぶん会っ 0) ーカー ていないような気 いうラフな格好。

がしていた彼女。

「なあに、その顔?」

ミレイは、いたずらに笑った。

わたしが呆気にとられていると、 カさんは彼女

の肩に手を置いて、

もう知ってると思うけど、 彼女は君嶋ミレイ

「なんで、ここに……」

彼女は、 今日から我が家の 一員になります

が飲み込めず、 ーカさんは、 二人の顔を交互に見ながら口をただぱ 高らかにい い放った。 わた は 状

込んだまま手を挙げて、

ぱくさせる。

ミレイは、

カー

のポケ

ット

に突っ

「よろしくね、

マナ

そういうと、 あらしがふわり と彼女の肩に乗っか 9

た。

「聞いてた通り、変な店だね」

興味津々に店内をうろつき始めた。 変、 ていうのは悪い意味ではない ミレ は

「まあ、

QUE:03 そのまちで / Butterfly friends.

一ちょ それを横目に、 何 がどうなっ わ たしはトー てる カさん 0) か 間 説 明してよ つ める。

だから、 11 た通りよ イも今日からこの家で

暮らすの

「や、だから、 まあまあ落ち着いて。 ーカさんは、 な 荒馬をなだめるような んで?」 とりあえず、 座 П りなさい 調だった。

わたしは、 いわれた通りひとまず席に着 11 た け

何

だかこっちがおかしいみたいで納得がいかな 41

わ。 くれないかって。 エディプスから打診されたのよ、 だから当然、 普通の一四歳が見る世界を知らな ミレイはずっとあの施設の うちに住 中に まわ せ W

あの子も外で生活して、 てミレイも、 プ 口 フ ェトである前に未来あるひとり 社会を知るべきでしょ。 だ

人間なんだから」

で、 でも、 なにしろ急な話だったから、 わたしに何 0 相談も な そび

マナ

に話し

だっ たのは悪かったわよ。 ていうし、 うちには部屋だって余ってる。 でも、 費用は 全部向こう持ち それに、

の中が賑やかになって楽しそうでしょ?

は、 ぞろ ない場所で、 りそうだ。 ひとりで歓声を上げたりする。 は興味深げに観察をしていた。 「マナは、 わたしは再び視線をトーカさんへ戻した。その質問 いの 思いがけず返答を詰まらせた。 た しは、 陳列棚の前にかがみ込んで、 ただ、 いや? ひとりで暮らしてもらうこともできるわ」 ミレイに視線を向けた。 賑やかなだけで済めばいいけど… もしそうなら、 たしかに、 ときどき 彼女にはここじゃ 物を手にとって ミレイは、 「おー」 賑やかに とか、 珍品

別に、 いやってわけじゃないけど:

'それじゃ、

決まりね!

かりに手を叩き、 ーカさんは、 その言葉を待っ 立ち上がった。 ていた、 といわんば

を、 はミレイを部屋まで案内してあげて。 「今日は歓迎会ね。 ミレイの部屋にしてもらうから」 私は料理の支度をする 二階の空き部屋 から、 マナ

「え、ちょっと……」

ーカさんはわたしの声に耳も貸さず、 ミレイを呼

びつけた。

「ねえマナ、 び っくりした? び っくりした?」

やかすように何度も訊いてくる。 わ たしのあとから階段を上がっ てくるミレイ 彼女は、 あの大きな が、 冷

段ボール箱を抱えて いた。

「当たり前でしょ、 もう・・・・・

わたしがため息まじりに返すと、 はうれ

うに「ふふ」と笑った。

ここが、ミレイの部屋だ ょ

年も使っていない部屋だっ 部屋の扉を開け、 電気のスイ たけど、 ッチを入れる。 まだ蛍光灯は切れ もう何

てはいなかったようだ。

……中にあるものは好きに使 つ てい いよ、 多分」

段ボール箱を抱えたミレイが、 わたしのあとから部

屋に入ってきた。

部屋の中にはベッ ドと机と、 あとは小さな本棚が あ

るだけだ。

この家の二 階に は つ 0) 部屋がある。 ひとつはも

ちろん、 わたしの 部屋。

屋 んの部屋に移った。 ツオミおじさんが亡くなってからト へ移したので、ここはもうからっ こっちは以前トー カさんの トーカさんの物は 部屋だったのだけ ぽ 同然なのだ。 全部そちらの部 カさんはおじさ بنك 夕

_ ^]

たようだった。 見回した。 ミレイは床に箱を置いて、 その 肩に乗っていたあらしが、 「ヘー」は、 なかなか部屋を気に入っ 寂しくすら見える部屋を ベッドへと

移動し、 そのままそこで丸くなった。

「あらしも、気に入ったみたい」

辺へ寄っていく。 ミレイは笑った。 外の景色を眺めるミレイは、 すると、 今度は出窓に気づ あるも て窓

感じに見えるんだ」 「おっ、見える見える へえ、 外から見たらこんな

のを視線の先に見つけた。

沈みかけた陽で赤く染まる景色に溶け込み、 できる。 この家からは、宇田川の街を遠くまで見渡すことが その景色の中には当然、 あの 壁 もある。 壁は佇ん

「なんか、 あんま現実感ないなあ」 でいた。

ミレイはぽそりとつぶやく。 遠く を見つ める目は

どこか不安そうにすら見えた。

が 鳴った。 その時、 携帯電話の着信音みたいだ。 部屋のどこかから、 聞き覚えの な 41 電子音

耳を澄ましてみると、 どうやらあの段ボ ル 箱 0

中

から鳴ってるようだ。

「あ、そうだ、忘れてた」

した。 ミレイはそういって、 中身をがさごそとまさぐると、 段ボー ル のガムテープを剥が 奥の方から携帯

「えっと……」

電話が出てきた。

適当にタ を見る。 ようで、 不慣れな様子で、 操作方法がよくわかってないみた ッチパネルを触っていたら電話がつながった ミレイは携帯電話 のデ いだけ 1 ス プ بنك

心配ないって。 ちょっと待って もしもし? え? あ、 うん。 マナなら目の前にいるけど。 さっき着 いたとこ。 別に

ミレイは、 わたしへ 携帯電話を差し出した。

「代わってくれって」

え? わたし? それ、 誰なの?_

「出たらわかるよ」

戸惑いながらも、 わたしはそれを受け取って、 電話

「あ、僕だよ、口に出た。

僕。

わ

かるかい?」

「え、リイチさん?」

うとした声だ。 他人と聞き間違うのが難し

,

明るく、

ひょうひょ

「そうだよ、 声だけで気づいてくれるなんて、 うれ

いなあ」

リイチさんは ちょっとうっとうし なるく

大げさに喜んだ。

「その後、 調子はどうだい? 元気か 41

「はあ、 まあ……」

談してくれ。 「そうか。 何か、 今のところ、 困ったことでもあっ 僕は世界で一番プロ たら 11 9 フ でも相 エ

1

に詳しい人間のひとりだからね。 君が知らない君のこ

わかることがあるかもしれない。 それはそうと

そこから、 リイチさんは内緒話するみたい に小声に

なった。

「ミレイのことをよろしく頼むよ。 彼女が外の世界で

見えて、 生活するのは、 意外と小心者なところがあるからね。 物心ついてから初めてのことだ。 助けて ああ

やってくれ_

え、 はい

返事をしながら、 わたしはついミレイを見てしまっ

は、 慌ててわたしから電話を取り返す。 それで自分のことを話していると気づ いたミレイ

「ちょっと、 リイチ……何か余計なこといってない?」

あからさまに不機嫌そうにいった。

声が、 んなこというわけないじゃないか」 リイチさんの声は聞こえないけど、 今にも聞こえてきそうだ。 などという軽い 「やだなあ、

それから少しして、ミレイは渋い 顔のまま電話を

切った。

「マナによろしくってさ」

「そ、そう」

「あたし、携帯って持ったことないんだよね。 使い 方

とか、よくわかんない」

ミレイは携帯電話をポケットにつっこみながら、 続

けた。

かったしさ。それに、 ても繋がってるなんて、 「今までずっとエディプスの中にいたから、 あんま好きじゃない。 いつも人の気配を感じて落ち どこに 必要な

つかないじゃん」

「じゃあ、それは?」

「これは、 キナミが持ってろっていうから仕方なく。

「学校って、

から

連絡取れないと困るからっ

て、

それはまあ、

理ある

外の世界のことなんか。でもキナミが、 なきゃ毎日の献立をナス尽くしにするなんていうから 「大体さあ、 そういうと、 あたしはどうだっていいっていった ミレイはまた、 視線を窓 いうこと聞 0) 外 戻 0) Ĺ

うだ。 ミレイは、その単語を口にするのもいやだというよ よっぽどナスが嫌いらしい。

たいだ。 募っていく。 まるで、 壁の向こうへ念を送ってい るみ

さらに続けて、ぶつぶつと外川さんの愚痴を

「あ……そうだ、 マナ。 11 つこ訳 11 7 振り返った。 41 <u>.</u>

ミレイは、思い出したようにいって、

る。 視線がうつむいていて、足の指先をもじもじさせてい 心なしか、 少しためらっているようにも見えた。

何?__

…学校? どんなとこ?」 えー みんなが集まっ て勉強

り、 「そんなのわかってるって。そうじゃなくて、 部活したりとか もっと

雰囲気っていうか」

入ってるとかで、 一うしん、 どういう友達がいるかとか、 人によって全然違うと思うけ 何 0) 部活 13

でも、 何で急にそんなこと?」

すると、ミレイはくるりと振り返り、 段ボ ル 箱 0

前にかがみ込んだ。

箱の中には、 ハンガ 付きの スー ツカ バ が、

折りにされて入れられている。 それを手に取って、 ミレイは立ち上がると、

それは意外にも、 見慣れた服だった。 わた

のジッパーを開

いて、

わたしに中を見せた。

力

のように袖を通している、 学校の制服だ。

「それがあるってことは……

そ。

明日からクラスメートだよ」

驚きもここまで立て続けに起こると、 もう呆れるこ

とくらいしかできなかった。

この家に新 その夜はトーカさんが豪勢な料理を振る舞っ しく増えたひとり(と一匹?)を盛大に 歓

した。

まってしまった。 こんなふうに唐突に、 わたしたちの共同生活が 始

CHAPTER=4

代半ば 数 は、 際立って若々しい。 Þ わ の武勇伝を持つ。 空手五段の た その上小柄で童顔なため、 たち 0) 担任である永井アミ 腕前と、 だけど、 都市伝説的にささやか そんな風貌に反して彼 先生たちの 先生は、 まだ二 中 れ で る

らまれた 彼女の前では、 カエ ルみたいになってしまう。 どんなや んち や な生徒だっ 7 蛇

返る。 が 朝 のホ たって、 ムル 1 アミ先生が現れた途端、 ムが始まれば、 それまでどれ 教室は静ま だ け 騒

だざわついて だけど今日だけ いた。 は ミ先生が現れ も教室内 はま

きた見慣 理由は簡単だ。 n な い顔に、 アミ 先生 みん な興味津 0) 後 ろ 13 々なのだ。 0 つ 61 7

は は みんな静か 13 ろ]

教壇 に上がったアミ先生は、 出席簿を叩 11 た。

後 回 7 b あれなの で、 先に 紹 介 します。 は 11

あいさつして

アミ先生はそう促すと、 黒板に彼女の名前を書き始

めた。

「君嶋ミレイです。よろしく」

静まり返った教室に、 ミレイの素っ気ないあ

起こった。ざわめきを取り戻した教室内には、 すると、 少し遅れてから、どこからともなく拍手が 歓声に

も似た声があちこちからわき上がる。それを受けるミ レイの表情は、どこかぎこちないようにも見えた。

だけど誰もそんなことは気づかない様子で、 かか

わいくない?」「足長ーい」「顔小さいね」などなど、

方々から聞こえる声は、要するにミレイに対して好意 的なことばかり。彼女はとても歓迎されているようだ。

うそうだ。そんなわけだからみなさん、それなりに仲 君嶋は、 入野の家に下宿してて、学校もそこから通

良くやってくれ」

アミ先生は、沸き返る教室とは相反して、いつも通

りの淡々とした声でいった。

どうしようもない。 ちを見ている。「何で黙ってた」という顔だ。だって、 上のミレイに戻った。でも、スズカだけはまだこっ 教室内の注目が一度わたしに集まって、またすぐ壇 わたしだって昨日初めて知ったん

だから。

一君嶋の席は ・ああ、 あそこ空いてるな」

アミ先生が、 あそこ、 といって指差したのは、 わた

しの隣の席だった。

野の隣だし、 ちょうどい 11 や。 まだ教科書とか

揃ってないから、助けてやれ」

ミレイは、 教室中の注目を浴びながら、 机 向 か

た。

「よろしくね、先輩」

そういって、 ミレイ は腰を下ろし

× ×

「ちょっと、どういうこと!!·」

ホ ームルームが終わると、 目散にやってきたスズ

カは、 不満をあらわにわたしの机を叩いた。

なんで、 「あの転校生、あんたと一緒に住んでるんだって? こんなおいしいネタ、 あたしに黙っておくの」

「ご、ごめん……いろいろあって」

スズカの剣幕にたじろぎながら、 わたしはミレイ

視線をやった。

ミレイはすでに、 クラスの女子たちに囲まれて 11 た。

か、 甲高 わたしからはその姿が見えない い声の真ん中で、 ミレイがどんな顔をして 0 11 る

0

彼女が、 なきゃいいんだけど……。 たしには全然想像できなかった。 自由奔放、 普通の学校生活をうまくやっていく姿が、 もしくは身勝手で強引なミレ おかしなことになら そ ん わ

「ちょっと、 聞 いてる?

スズカが、 ぐっと顔を近づけて睨み飛ば

「ちょっと、 やめなさいって。

きっ

لح

(V

ろ

61

ろ事情が

あったんだよ」 あおいちゃんがわたしを見かね、 間 つった。 する

スズカは一歩引 いて腕組み した。

「ふん。まあい いや。 願ってもないチャンスが来た

けだしね」

「チャンス?」 わたしとあおいち や んが 口を揃えて 聞き返すと、

ス

「君嶋さんを、全部にズカは不敵に笑った。

引き込む のよ。 11 11

スズカは、 わたしの目線までしゃがみ込んで、 続け

た。

わ。 よ。 やす 今 0) には、 な あ まさに最 ところ んなに だ 何 0 高 5 映研 か た わ か 0 逸材 信 0 0) 11 話題性 件 頼 61 じ 転校生、 も実績もない で ゃ ない は つきりし まり すぐ 学校中 全部 広告塔が たこ への 0 噂 が 必 依 要な あ 頼 な を る る 増 わ。

はな え、 でも、 6 や 映 研手伝 った もう 依 頼を増やす必

て、 動す 研 な ウスラ 存 甘 いやあ、 ズカ んか 続 部長会議でサ よ、 件で味を ば が約束されたわ の瞳 しなく バカに偉そうな顔されて隅っこの席に座っ 地位だ どうだろうね… マナ は てよくなる。 め 黄金色に輝いていた。 ツ って上げら て、 力 た it 9 部 じ た 調子に乗っ ゃ 0) 0) 11 な 細眉トン れ いことづくめじゃな る。 回 11 0 P ちゃ そ 部費だって上が 0 マや、 た れ った 13 から 要するに、 たわけだ。 テニス b 7 っと 映 部 部

うだ。 部 力 はそん 0 しは否定の 部長として なことおかまいな 意味を込め の自分) 41 0) 未来し 7 首を もう彼女に 傾 か見えて げ た は け (V な 輝 ス 全

その時、教室の扉が開いた。

ホ ームル ムを終えて 度 は 出て 9 た アミ先生 が

あ

ちょ

っとみ

んな

か

戻 9 てきて いた。 先生の声 IZ. 騒が 教室内が静 か

になり、

学校内を軽 ひとつ いしさ」 W 11 忘れ 案内してやってくれな てたんだけ 放課後、 いかな。 誰 か の学校 君嶋

は すると、 いは 41 は 間 髪 11 れず手を挙げ あたし いきます た 0) は あ スズカだ たしたちが、 9

いきます!_

ちゃんが含まれているんだろう。 あたし 『たち』 0) 部分に は、 当 一然わ た とあ お 11

何だお前、 やけにやる気だな: まあ 11 11 や

あ沢渡に」

À ずる 41

決まりかけたところに、 声が 上が 9

それは、 イを囲んでいた女子グ ル] 0)

青山さんだ。

青

山さんは

人当たりもよく友達も多

11

生 徒

所属 いう人は少な していて、 0,1 成績もいい優等生で、 だけど、 スズカとの相性は、 彼 女のことを悪

゙゙あたしたちもいきたいです!」

とは

いえない。

青山さんは、 手を挙げて立ち上がる。 かしスズカ

は、 あざ笑うように、

何でよ、早いもん勝ちとかじゃないでし 悪いね青山、 ここはあたしたちで決まりよ」

早いもん勝ちだよ、民主主義だもん!」

民主主義なら、 話し合いで決めなさいよ!」

を主張するから、 うるさいな、 そうやってあとから来たやつらが権利 世界から戦争がなくならないんだ

「そう思うなら、そっちが平和的に譲りなさいよ!

二人の争いはますますヒートアップしていく。

教室

ちから聞こえ始めた。 が次第にざわめき出して、 もっとやれとか、 面白がるような声があちこ どうでもいい

やっぱり早見派だ」などという声まで。 とか、あるいは全然関係ない「君嶋もい いけど、 俺は

「どっちでもいいだろ、 何でそんなことでやりあって

んだお前ら:

ミ先生は、 もはや呆れ顔で壁にもたれかかってい

る。

永遠に続 くか と思われたその争い 0) 中 校内放送の

ルが響いた。

さんは、 生徒会のみなさんにお知らせします。 放課後、 第二会議室へ集合してください。 生徒会の み

り返します。 生徒会のみなさんは

高らかに笑い声を上げたのは、 スズカだった。

え?」 いようで。 残念、 青山! これじゃ、 生徒会のみなさまは、 学校を案内するなんて無理ね 放課後お忙

スズカの勝ち誇った言葉に、 青山さんは悔しそうに

唇をかんだ。 「くそう……」

青山さんの肩の 下まであるポニー テー ル が、 残念そ

うにしなだれた。

というわけで先生、 君嶋さんは、 あたしたちが責任

もって案内しますんで」

「ああ、 呆れた調子で、 はいは 41 ……それで アミ先生は、 e V ミレイ か に訊 君嶋

まあ、 別に

ミレイが頷くと、 スズカは満面も笑みを浮かべた。 b

X X X

そ ñ から、 わた しとミレ は あまり会話をかわすこ

ともなく 時 間が過ぎた。

授業も受けいて がミレイ 授業の合間 の席にいた の休憩時間になると、 た。 ミレイは思いのほ 常 に青 か大人 Ш さ ん たち

数学で小テストがあり、 なった。 それどころか、ミレイ わたしはミレイ は超優秀だっ の答案を、 隣同士で採点をすることに ミレイはわたし た。 時 限 目

結果、 度もなかった。 わたしがミレイの答案にバ 満点だったのだ。 ツをつけることは

答案を答え合わせする。

今日 ても難 数学の先生は意地が悪いところがあ のテストだって、 い小テストを、 相当難しかったけど、 抜き打ちでやってきたりする。 って、 ミレイ どう考え は

使った跡さえも見当たらな 難なくその問題を解 わ からなかったというのに。 いて いた。 61 答案には、 わたしは、 全体の半分 消しゴムを

ミレイからわたしに答案が返された時、 彼女は半笑

11 だった。

た言葉は、

悔

しさに顔を引きつらせながら、

何とかひねり

出し

たまたま、 苦手科目なだけなんだから、

「でしょうね」

てしまった。 ただ、 四時限 目 の体育の 時 には、 少しだけハラハラ

ムを作って、 今日の体育は、 試合をする。 バスケだ つ た。 クラスで三つのチ

なってしまうんだろう。ミレイはそのあたり、 で普通の中学生女子とスポー それまで考えていなかったけど、 ツなんてしたら ミレイ の身体 体どう 手加減 能

とかできるのだろうか。 結果からいうと、ミレイは活躍した。

まい。 スピードもジャンプ力もあって、 隣のクラスには女子バスケ部でレギュラ ボ ルさばきもう の子

きだった。 がいるのだけど、その子にひけをとらないくらい

らしているのに、 に決めた。 ドリブルで相手をかわ そして何より、 ミレイひとりだけ、 して、 みんな激しい運動で息を パ スもシ 終始涼しい顔で、 ユ

切

息ひとつ 切らさな W

だった。 ギトとの戦いで見せた彼女 どうかわ たしかに、 からないほどの能力だったけど、 女子どころ か男子でも太刀打ちできる の力には遠く及ばな それは b か コ

みんなから は十分だったようだ。 でも今日 でひとっ飛びでダンクシュ 度のレベルだった。 あのときの のミレイ 一目置かれる存在になっていた。 力を発揮し は、 昼休みになるころには それでも、 あくまで運動神経 たなら、 トを決め 周 ゴ 囲 てしまう の度肝を抜くに ルからゴ 0) 41 W 中学生 すでに だろう。 1 ル ま

X

X

X

あ

腹減

つ

た

昼休みに な って、 いつも 0) ように、 スズ カとあお

ちゃ んがわた しの席 へやってきた。

たしはお弁当を出そうと、

カバンを開け

7

思

出

た。 分も渡されていたんだった。 わ お弁当が二つ入っている。 そういえば

隣 の席を見ると、 ミレイはどこか へ消えて 61 る。

教

室を見回してみてもいなかった。

教室内は、 昼休みとはいえ今日はずいぶ んと賑やか

別のクラスの人たちもたくさんいる。

わたしは、その状況を不思議に思いながら、

四

五

人で机を囲んでいる青山さんのところへいった。 ねえ、 青山さん。ミレイ、どこにいったか知らな

. }

あ、 君嶋さん? さあ、 あたしたちもわかんないの」

「どういうこと?」

ところがあるから先に食べててくれっていって、 「なんかね、一緒にお昼食べようっていったら、 どこ

かにいっちゃった」

一いくところ……

わたしは、首を傾げた。 一体、 どこにいったんだろ

う。

呼び出されたりとか、そういうのは見なかったよ 「あたしたち、 今日はずっと一緒にいたけど、 誰 かに ね

青山さんたちも、顔を見合わせて首をひねる。

そっか、 ありがとう」

としたところで、 わたしはその場を離れ、 気づいた。 携帯でミレイに連絡しよう

「しまった、番号聞いてなかった……」

た。 こんなことなら、 立ち尽くしていると、うしろからスズカが顔を出 昨日のうちに聞いておけばよ かっ

した。

「マナ。 何やってんの、 早く食べようよ」

「あ、うん……」

スズカが、わたしを席に引き戻す。

ばお腹が空いて帰ってくるんじゃないかと思いつつも、 ミレイはお弁当を持ってないわけだし、 ほっ ておけ

半分、まだ彼女の行き先を考えていた。

そして、椅子に座った瞬間、

ある場所がひらめ

わたしはお弁当を手に立ち上がり、 その様子に二人

は目を丸くする。

「マナ、どうかした?」

「ごめん、二人とも。ちょっと今日は、先に食べてて」

あおいちゃんは、少し心配そうにわたしを見上げた。

そういうと、スズカは目を丸くして、

「え? どゆこと?」

゙ちょっと、用事ができて……ごめん」

ていった。あとで何か、 呆気にとられる二人に背を向け、わたしは教室を出 適当な言い訳をしておこう。

X X

X

だらしなく ド アノ ブ 傾 に提げられた 11 7 いる。 明らかに、 『立ち入り 禁止』 誰 かが 勝手に動か の看板 が

してドアを開けた跡だ。 重たい鉄扉は、

腕

の力だけ

では開

かなく

身体を

押 し当て体重をかけた。

変わらず掃除がされてないままだった。 ギリギリと錆び付いた音を立て開 扉。 屋 上は 相

給水塔に近づくと、 上から小さな声だけど、 鼻歌が

聞こえた。

相変わらず、 へたくそな歌だ。

やっぱり、 ここにいた」

を向けて寝転がるミレイの姿があった。 はしごを上がり、 顔を出すと、 そこに はこちらに背

は っと振り返ったミレ 1 は、

・なんだ、 マナか」

何 安堵したような声でつぶやき、 その態度。せっかくお弁当持ってきてあげた また背を向 け 0)

のお弁当を置いた。

た

しはミレイ

0)

横

腰掛けながら、

持

てきた二

レイ は、 そっ ぽを向 たまま、

そりゃ、 どうも」

素っ気なく

どうかしたの?」

…別に」

は歌だけじゃなくて、 明らかに「別 E 9 て感じ 嘘もへたな じゃな 「調だ。

0)

か

れない。

何なの。 いわなきゃ わかんな いよ

だから、 別に何でもないってい ってるじゃ ん

その突き放す感じに、 わたしはカチンときた。

・・・・・あっそ。 話 くれないなら、 お弁当こっ から

投げ捨てるから」

えつ、

ちょっと待っ

ようやくミレイが立ち上がり、 こちらに 向 わ

たしと目が合うと、 ちょっとバツが悪そうに、

「わかったってば……」

観念し たように、 はそ 0) 場 に座り込んだ。

教室、 いっぱい人いたでしょ」

一ああ、 うん。 なんか、 いつもより賑やかだっ た

見ら じゃなくて、 あ れて、 0) 人たち、 ひそひそ話 今日一日、 あたしを見にきたらし したりしてるんだ。 廊 下歩い てるだけでジ 11 0 あた そ しは 口 れ ジ だ 口

世物小屋の喋る九官鳥かっ て 0)

は、

わ

しゃ

わ

ゃと頭をか

(V た。

あ てるらしいんだよ の青山って子に訊い ね たら、 わけ あた わ か んな 学校中で噂 41

るのだ。 に異常なまでの速度を発揮する。 レイ b からすれば当然 0 とか はそれを不可解なことのようにいうけ わ 41 11 ものとゴシップを主食に生きてい のことだっ た。 女の子 女子の は 伝達網は、 11 つも、 わ

なんか疲 ħ た なあ。 もう帰 りた W

ため息まじりに、 ミレイ はまたごろんとそっ ぽを向

て寝転が 0 た。

だめだよ、

まだ授業残

0

てる

んだ

から

あ あ、 あらしがそば に 11 な と変な感じがする んだ

よ。 今ごろ何してるかな」

は、 は 一あらしー 当然学校に連れてく ٤, 情 け る な わ 声 け には で Š いかない Þ

ので、 今は家でお留守番をしている。

「今までずっと一緒だったのに……」 ミレイは、 ふてくされたように、

少しくらいは離れたりするでしょ?」

「ずっとはずっとだよ。 一度だって離れたことな

何するときもずっと一緒だったもん」

「そっか。大切な友達なんだね

すると、 ミレイは振り返り、 首を傾げ

「友達……そんなふうに考えたこと、 それから、 少し考え込み、うつむき加減に言葉を続 なかったな」

けた。

「ねえ、 青 Ш って子に、 11 れたんだけど

何を?」

「友達になろうって」

そうなんだ。なればい

でも、 友達って、 何な 0

何って、 いわれてもなあ・

じゃあ、 あたしとマナは?

ミレイに問いかけられ、思わず答えに詰まる

だってそれこそ、 わたしはそんなふうに考えたこ

がなかった。普通じゃない出会い方をして、 一緒に住んで、 隣の席で授業を受けている。 いつ 彼 0) 間

せいで考える暇なんてなくて、急にミレイが自分の何 いるといつも状況が目まぐるしく動いていく。 その

なのかと訊かれても、 わからないから、 もう単純でいいと思った。 よくわからない。

じゃあ、こうしよ」

わたしは、 ミレイに手を差し出していう。

これから、 わたしたちは友達ということで」

ミレイは、 少し戸惑ったように、わたしの顔と手を

交互に見る。

ない物体にでも触れようとしているみたいだ。 それから、 恐る恐る手を出す。まるで、 見たことも

その様子に、 わたしは思わず口元をほころばせてし

まいながら、

…どうも」

「よろしく」

ぶっきらぼうにつぶやくミレイと、 しっかり握手し

た。

「お昼休み終わっちゃうから、 早くお弁当食べよ」

「今日、 何?

よ

「昨日の残り物サンド。 だから、 ナスは入ってない

わ たしたちは、二人して包みを広げた。

あたし、 空が見える場所でご飯食べるの、 初めてだ

ミレイは、頭上を仰ぎ見た。

わたしも、 入っちゃい けない 場所でご飯を食べるの

は初めてのことだった。

× ×

「それじ ゃ 今日はここまで。 みんな気をつけて帰れ

それぞれ解散を始めた。

アミ先生のその言葉を合図に、

クラスメ

たちは

そして、 予想通り 一目散に、 スズカがこちらへ 駆

寄ってきた。

「やーやー、 やっと終わりましたね] 日 が

とても上機嫌そうにニコニコ笑

って

いる。

スズカは、

これからが本番だ、 といわんばかりに意気揚々とミ

イのほうを向く。

まだあたし名前 41 9 てなか 0 た ょ ね。 あた は 沢

渡スズカっていうの それと

スズカは自分の肩越しにうしろを見た。 まだ席に着

いたままでいるあお いち ん の肩を軽く叩

この子は、 早見あおい」

あ、 よろしくね」

突然振られたので少しあたふたしながら、

あ

お

て、 ちゃ んは立ち上がって軽く一礼 した。 スズカ は 続 け

竪苦し 0) 嫌 いだから、 あた しらのことは、

あおい 9 て呼んで」

「スズカと、 あおいね。 わ かった」

ミレイ は、 たしかめるようにそれぞれを指差しつつ、

頷いた。

自己紹介も終わったことだし、 そろそろ

そういってスズカが踵を返すと、そのすぐうしろに、

青山さんが立っていた。

一うわっ、 青山。 びっくりさせない でよ、 ぬらり

んかよ」

悪かったわ ね

何の用? ミレイの案内なら、 あ たしたちが

違うわよ。 もっと、 大変なことなの

な、 青山さんの顔が、 何なの? そんな顔して」 急激に青ざめていく。

だならぬ 雰囲気を察して、 スズカは恐る恐る訊 41

た。

「本当に、ごめん――」

いづらそうに言葉を一 旦置いてから、 青 山さんが

実はね、 今日 ク 口 マティ に君嶋さんのことを話し

ちゃって」

「何 !?

元を覆 途端に、 い隠した。 スズカ 0 わたしにも、 血 相が変わ ŋ ことの重大さは あ お いちゃ 理解で ん

きる。

先生 は生徒の間だけ ク のニ 口 マテ ックネ 1 とは ムだ。 この学校の体育教師である、 もちろん、 そう呼ば れて 黒る る 川かわ

カピカの のさわや に身体が仕上がっている。 年がら年中肌が黒 ´ウマ 歯 級 かな笑顔 の不気味さを放つ。 加えて強烈なポマ ホワイトニン 焼けてい 三六五日いつでも ードの香りが相まり、 て、 決して悪 グ ボ たか デ 1 41 先生ではな 0) ようにピ 標準装備 ル ダ 並

彼は顧問を務めるトライアス ロン 部にとても情熱を

んだけど。

ず、 まうという。 燃 に勧誘する。 やして 半年ほどでアスリー て、 ちなみに、 根負け 一度目をつ して入部 トの 去年入部した女子の先輩は け 身体に鍛え上げ た生徒は怖 した人たちは男女 ろ 6 れ ほ 間 て

夏休みが明けたら、

腹筋が八つになって帰

ってきた

0

だそうだ。

ちゃって。 んのこと」 「今日の移動教室の帰 早速訊いてきたの。 り、 ば 0 た ŋ 転校生 ケ 口 マ テ 0) 1 君嶋さ 13 会

青山さんは、 申し訳なさそうに話す。

やっていたか、 になってきて。 最初はかわ 入る部活は決まってるのか、 てたんだけど、 運動神経はいいか、 だんだん質問 何かスポ って」 が 具体 ツ 的

あんた、 なんて答えたの?」

ちゃって 押 し負けて、 その……つ 体育 0) 時 のことを話

ミレイ が バ スケで大活躍 た話だ。 スズ 力 は、 頭を

抱えた。

「マジかよ、 青 そ れ 絶対アウト や ん。 絶対

目つけられたよ

「だから、 本当、 ごめんっ てば あ た しも、 何とか

ね ばろうとは思ったんだから:

青山さんは、 さらにうつむいた。

ティはここに来る。 とにかく、 まず教室から出なきゃ。 そうなったら、 もう逃げられな 確実に ク 口 マ

青春暗黒物語の始まりよ」

「あっ! スズカ、あれ」

の新校舎棟をつ 唐突に、 て慌てて窓際に向かい あお なぐ長い渡り廊下を歩く、 いちゃんが窓 外を見ると、 の外を指差した。 旧校舎棟とこ クロ マティ み 6

もうあんな所まで来てる

の姿があった。

スズカが驚きに目を見開いた。

「きゃあっ!」「うわっ、こっち見たあ!」

青山さんと、 あお いちゃ んは ひどく おびえたように

声を上げた。

「ミレイ、窓から離れて!」

わたしは、 ミレイを窓から遠ざけた。 事情が 11 ま ば

ち理解できていない彼女は、 かりだ。 「とにかく、 やつがここに来る前に、 ただ目を丸く 教室を出なきゃ」 る

スズカは声を低くし、 眉間に わを寄せる。

「そうだよ、早くいこう」

「待って、あおい」

焦るあお いちゃんを、 スズカが制し た。

問題は経路よ。

下へ降りるには、

玄関に近

い西

|階段

を使うか、 この教室から近い南階段を使うしかな 11

う。 つまり、 間違ったほうを選べば、 1/2の確率でクロ マティと鉢合わせしちゃ アウトだよ」

「それじゃ、どうすれば」

不安げにあおいちゃんが いう。 スズカは、 みんなの

前に一歩出た。

「こうしよう。

片方の階段から、

ひとりずつ降り

Ź

それで、 クロマティ と鉢合わせたら連絡を入れた上で

らは青山が降りて」 何とか足止めして。 西階段からは、 あおい。 南階段か

集まりが……_ ち、 ちょっと待ってよ。 あたし、 これから生徒会の

慌てたように、 青山さんが言葉を挟んだ。

たにだって少し責任はあるわけだし、それ んなもん、 こんなにかわいいミレイが、 少しくらい遅れていきなさいよ ミッキー 口

なっちゃ っても

わ かったわよ……

青山さんは、 しゅん、 とポニー ルをしなだれさ

せる。 スズカは、さらに続け た。

ナがミレイを下まで降ろすわ。 「そうして、 安全な経路を確保 マナ、 た 0) あんたはミレ あ

から離れずそばにいて。 最後の砦としてね

゙゚ゔ、 うん。 わかった」

ごくりとつばを飲み下 わ たし は 頷

よし、二人はもう出て!」

スズカの号令で、 あお いちゃ んと青山さんは教室の

外に出ていった。

残されたわたしたち三人 は 教室の 屝 13 隠 n

にして、二人の行方を見守る。

りだった。 だけど、 階段を降りるまでは、 予 想外の事態が起きた。 何とか見守ろう、

いうつも

西階段に向かったあお いちゃんが、 突然階段の前で

立ち尽くしてしまったのだ。

何してるんだ、 かも、 かなり慌てた様子だ。 あおいのやつ

ちらを向いた。 なつ……? スズカがそうつぶやいた直後、 手で大きなバッテンを作っていた。 まさか、 もうクロマティが?! あお いちゃん は

三階だぞ!」

がってくるなんて、 だって、さっきまで下にいたのだ。 スズカは驚愕する。 考えられない。 わたしも、 同じ意見だっ こんなに早く上 た。

るクロマティを、 にもう三階まで上がってきたのだ。 しかし本当に、すぐクロマティは姿を現した。 あおいちゃんが何とか引き止める。 素通りしようとす 本当

段差を見ると負荷をかけて昇らずにはいられない さに根っからのアスリート… 「あいつ、さては……走って昇りやがったな… ま

アスリートとは職業ではない 生き方なのであ る

る。 すると、 スズカは慌てて携帯を取り出し、 どういうわけか近くから着信音が聞こえてく 青山さんにかけた。

0) 横 南階段方向の廊下から、 には、 青山さんも一緒だ。 アミ先生が歩いてくる。 そ

捕まっちゃ ったんだ、 青山さん……_

アミ先生は、 生徒会の顧問も務めている。 おそらく、

途中で鉢合わせてしまい 緒 に会議室までいくこと

になってしまったんだろう。

何やってんだ、 お前ら

教室の前を通るアミ先生は、 扉に張り付くわたし

ちを不思議な様子で見た。

い、いやあ、 スズカは苦々しく笑ってごまかし、 別に何も… 先生さよなら その場をやり

ごそうとする。

「変なの

アミ先生は納得した様子ではなかったけ بخ 先を急

いでいるのか、 すんなり立ち去っていった。

うしろで、青山さんはわたしたちに向け、 小さく

「ちっ、あの役立たず……」

ごめん」と手を合わせていた。

スズカは舌打ちをして、 青山さんをにらみつ け

だけど、 これで南階段の道が開いた。

いこう!」

廊 下の先にはクロマティがいるから、 スズカを先頭に、 わたしたちは南階段へと向かう。 バタ バタ

ないよう、 決して走らず、 何食わぬ顔で歩く。

そして、 階段にさしかかるや、 勢いよく駆け下りた。

これ一体何なの?」

ミレイは相変わらずそんなふうに訊いてくるけど

わたしは その時、 「今は黙ってて」と、 スズカの持っていた携帯が鳴った。 制してお いた。

もしもし! どうした、 あおい?」

電話の主は、 あおいちゃんのようだ。

何だって!! わかった、 急いで出る!」

慌てて電話を切り、わたしたちに向

け

スズカは、

しくて、 クロマティ、 今、 あいつも階段降りたって!」 あたしたちが階段降りるの気づいたら

゙ええっ!!.]

それは本当にまずかった。 なぜなら、 わたしたちは

玄関を必ず通らなくては いけない。

う。 マテ 玄関までの距離は、 ィが駆け下り れば、 西階段のほうが近 確実に玄関で待ち伏せを食ら いのだ。 ク 口

ど、 どうしよう」

「とにかく、 早く降りるし かない 口 マティが玄

関に着く前に!_

そんな二人のうしろからミレイが、

「ねえ、だから、

一体

「ちょっと今黙ってて!」

口を閉じ、 わたしたちが同時に一喝する。 ただ階段を駆け下りた。 そ 0) 剣幕にミレイ は

「ちっ、間に合わなかったか」

スズカが舌打ちした。

は一足早く階段を降りきり、 廊下の角に身を隠し、 玄関を観察する。 すでに下駄箱の前で待ち ク 口 マティ

構えていた。

「これじゃ、 どうやっても見つからずに抜けるの は 無

理だね……」

「マナ、しょうがない。 もう正面突破で抜けるわずか

な可能性にかけるしかないよ」

スズカとわたしは見合って、 覚悟を決めたようにお

互い頷いた。

そして、意を決して、 廊下に踏み出し た瞬間だった。

「黒川先生ー!」

廊下の、 わたしたちと反対側の方向から、 その声が

聞こえた。

なんとあおいちゃんだった。 わたしたちは、 一旦立ち止まる。 姿を現したのは、 わけ

にいかない。

何だ早見、まだなんか用か」

ないですか?」 ぷにぷにしてきちゃって。 「えーっと……あの、 あの 11 最近ですねえ、 いトレーニング方法とか、 <u>ー</u>の 腕が

「二の腕、そうだなあ」

すると、あおいちゃんはこちらに向けぱちくりぱちく それらしい質問に、クロマティ は考え込み始 め る。

りと、ひどくぎこちないウインクで合図をした。

「あおい……あんたの犠牲は無駄にしないよ」

まバレないよう一気に通り抜けて、 スズカはそういって、わたしたちを促した。 クロマティのマー のま

クを外すのだ。

する必要なんてないように見えるが」 しかし早見、 お前全然細 いだろ。 れ以上シェ

は心臓が止まりそうになったけど、ここで足は止める 思いがけず、 ク ロマティが顔を上げた。

わた

したち

「あ、ああー、でも、 最近たるんできてる感じがする

んですよね]

注意を逸らそうとする。 完全に声を上ずらせながら、あおいちゃんが必死で 別に太くもなんともない二の

は: お 1, こに入れば、 えつ? 先生し だが早見、 った。 肩 …って、 越 13 スズカが立ち止まり、

か下駄箱に滑り込まなければ。 あお いちゃんが隙を作ってくれているうちに、 何と

腕を、

わざとらしく振っ

たり

中学生なんだから、 少し 肉がつくく

ああ

あおいちゃんの健闘むなしく、 今度こそ完全にク 口

マティに気づかれた。

先にいって。 それで、 何とか部室まで逃げて。 あそ

何とかなる!」

41 い残し、 スズカはク ロマテ イ に向か って

あ た しですねえ、 最近肉付きがよく

なっちゃって・・・・・」

お前君嶋だろう?! ちょっ、 11 や、 待ってくれ、 後に れな 話があるんだ、 41 お

背後からの呼びか ものすごい呼んでるけど…… け Ŕ 聞こえない フ リをして進む。

いいの

人が時間を稼 e V で いる間 に、 急 11 で 、靴を履 e V

k.

関を出た。

渡り廊下を小走りに抜けて、 どんどん新校舎から離

れていく。

さすがに息が切れ 苦门 くて振り返る。

「まだ来ないよね……」

そう、安堵しかけた瞬間だった。

「おーい!」

だいぶ距離を離り たはずなのに、 もうクロ は

追い上げてきた。

「うそっ!!」

スポーツサンダルだとい うの に、 信じられないス

ピードだ。怖い怖い怖い。

わたしは、 ミレイの手を引いて、 また走り出

「マナ」

とてつもなく苦しい状況で、 ミレ 1 -が話 かけてき

た。

一何つ・ あ、 あとに れない?

「えっ……そうだけど」「要は、逃げ切ればいいのね?」

「わかった」

するとミレイは、 逆にわたしの手を引いて走り出し

た。

ちょっと、 は、 速 いよ

するとすり抜けていった。 その人たちのほうから避けていってるみたいに、する 通り過ぎる人たちの間を縫 なんだか、 って駆け 風になった気分 ていく。 まるで、

げている。 ていく。 いがこみ上げて、堪えられなくなる。 このまま二人走り続けたら、 わたしもだんだん、 は、 その間にも、 やけに楽しそうで、 クロマティがどんどん遠の お腹の底のあたりから笑 壁も空も、 けらけら笑 何だ 41 声を って突

き破っていけるような気がした。

× ×

なんとか、 ことなきを得たわ ね:

部長席に腰を落とすスズカは、 疲れきったように天

を仰いだ。

本当、 あんな のこりごりだ わ

机に突っ伏しながら、 あお いちゃんがつぶやく。

ちらも、ひどく疲れている。

なんとかクロマティから逃げ切り、 安全地帯と呼べ

る部室にたどり着いた。だけど、 体を張ってクロマ

わたしは、二人にお茶を出してあげながら、 の進行を妨害した二人は、 もうくたくたの様子だ。

「でも、 どうする? クロマティ、 明日もきっと来る

「それなら大丈夫。 41 い案があるんだ」

スズカは、元気を取り戻したように立ち上がり、 Ξ

レイのほうを向いた。

ミレイは部室内をきょろきょろと見回している。

「ここは、 何の部屋なの?」 あたしたちの部室だよ」

へえ。 何の部活?

「全部」

全部?!

聞き間違えでもしたかのような表情で、 ミレイが返

した。

「ねえ、 ミレイって、 もう何の部活に入るか決めて

る?

いや、 あたしは別に

まだ先がありそうだったけど、 急にスズカがミレイ

の手を取ったので、 言葉が止まる。

「それなら、 ぜひ、 我が全部へ!」

きらきらと目を輝かせながら、 まるで求婚でもしているような格好だ。 スズカがひざまずい

最高よ。 だってもう勧誘なんてしてこないわ。それに、ここは なんてったって、学校で一番自由な所なんだ

「ミレイが別の部活に入ったとなれば、

クロ

マテ

から」 ミレイ は、 少し戸惑った様子で、

でも、 何する部活なの?」

だから、 全部! あたしたちのやりたいことが、 活

動内容。好きな時に好きなふうにやって、そんな部、

ほかにないでしょ?_

熱の入ったスズカの言葉にも、 ミレイは 「はあ」と

判然としない様子だ。

一マナも、 ミレイは、 この部なの?」 わたしを見ていっ

゙ゔん、まあ」

「いいよ、入る」 少し考えてから、 ミレイはスズカの目を見た。

「 う ん」

え、

本当!!」

は、 う っすらと笑顔を浮かべ、 頷 61 た。

やったーっ!」

感情を爆発させて、 スズカ は 跳ね 回る。 わ たし

おいちゃんは、お互いに目を丸くした。

ほ、 本当にい いの、 君嶋さん。 こんな、 よくわか L

ない部活」

あおいちゃんが、 信じられないと いう顔で訊く。 そ

れでもミレイは、 「うん」と頷いて、

だって、さっき、 なんか楽しかったし」

携だったもん。 「そうだよね! なんだかんだ、即興とは思えない連 あたしたち、最高のチームになれるよ」

スズカが満足げな顔で、深く深く頷く。

というわけだから今日は、 ミレイ の歓 迎会

をしよう」

スズカは、 威勢よく手を叩 た。

「それはちょうどい いや。 キャラメルク

げつ……それは 借しだもんね

にやりと笑うわたしに、 スズカは顔を青くする。

「わーいスズカ、ありがとう」

あおいちゃんは、 両手を合わせて首を傾げ、 かわ

くおねだりのポーズを決めた。

ちょっと、 お小遣い吹っ飛んじゃう…

「さ、いこいこ!」

焦るスズカをよそに、 わたし とあお いちゃんでミレ

イの背中を押して部室を出る。

「ちょっ、話を聞け――っ!」

ズカが追いかけた。 先へ先へと進むわた したちを、 悲鳴を上げながらス

CHAPTER=5

の頃は、 鳴る数秒前に目が覚めるようになった。 午前七時〇〇分。 起きる時間を身体が覚えたの セットしたアラー か、 ムが鳴 わた アラ しはべ 0 ームが た。 ツ

から起き上がり、 一日をスタートさせる。

身支度を整える。 午前七時一〇分。 ついでにそっと体重計に乗る。 洗面所で、 髪をとかして歯を磨き、

QUE:03 ₹0

増えてない。

いってきます

ぼ

している。

ると、 キモ ら人 間 お知らせしてくれるから。 七時五〇分になると番組のマスコットキャ はキモキモ わたしが一 かわ 間 らいだ。 ちょうどよく学校に着くのだ。 の手足が生えた化け物みたいなキャラク (V いと評判らしいけど、 日の中 i V 11 つも観る番組が決ま でテレビを観る そのくら わたしからするとあ 9 0) 61 て 目覚まし時計 0 は 嵵 í V ラが時 間に家を る理由 朝 0 夕 間 は 0) で、 か 出 を 時

れた。 あの目覚まし時計の化け そして今日も、 わたしは残り スポ のコ 1 物が ツニ ヒ ユー ーを飲み干し、 七時 五. スが終わ ○分を知らせ った直後に カバンを 7

取って立ち上がる。

立ち止まってい でも、 あれ? たら、 なんか忘れ 「マナ」とトーカさんがわたし てるような: 瞬

を呼び止めた。

|ミレイは?|

・・ああ

特大の忘れものに気づいたわたし は、 思わず声を上

げた。

をノ 上がる。 家の中 ツ クもな わたしの部屋の、 に走り込んで、 しに勢いよく そ 開けた。 のまま二 ひとつ手前 階 の部屋。 0 階段を駆 その 屝

-ミレイ!

だ。 る。 すや眠 付 部 屋 ょ っていた。 0) 、まあ、 たはずの部屋は、 中に飛び込むと、 たった数日でこんなに散らかせたも ていうか、 ミレイの荷物が散乱 ベ 9 ツ いこの ドの中でミレ 間まで綺麗に片 が すや

「起きなさい 学校い 時 蕳 でし ょ

す」とか「ごもも」とか意味のわからない言葉を口走 るだけで、 ミレイの頭上から怒鳴 眠りの淵から帰ってこない。 ってみても、 寝ぼけ 肩をつか Ź んで お

揺さぶってみても、 くすぐったそうに身体をよじらせ

るだけだ。

引っぺがした。 待っている余裕もな 布団の中には、 61 0) で、 わた ミレイとまったく は 布団を強 同じ 列に

あえず今は胸

にしま

9

7

お

いた。

体 抜 理 勢 け であらしも 引 た 9 間 ぱ ŋ 0 頭 眠 起こした。 って 9 て W た。 こんなに重 首 が わ ζ" た は ゃ *O*) L 曲 イを が る 無理

だ。 出 ケ わ にあとでいっ した。 た ツ よう つ拾 何だか、 は壁に からく Ŕ こう ってみたら、 く半身だけでも起こした状態 しゃ ておこう。 給 か いうのは、 食 か つ のパンを机 てい ゃに丸 れ ポ る制服を取 ケ 学校で配ら めた紙 0) ツ 奥に突 ŀ 詰 がぼろぼろ落ちる。 9 た。 め にできた っ込む人を 込まな れた すると、 ブ IJ 0) 思 で ポ

「はい、これ! 着替えて!」

T シ 応いう まだ目が開 ていて、 ヤ ツには 通 ŋ 突っ込みたく 『狂気のボンゴ』という謎 7 彼女は着 いないミ レイ ていたTシ て仕方な に、 か 制 服 ヤ つ たけ を 0 ツ 押し付 プ を脱ぎ出 IJ 1 け す。 が

伝えるけど、 を素早く イ が ミレイ スカ 出 か け が着替えて る準備はこれ かなりア それを直そうとする動きがあまりにも を後ろ前に履い いる ウ で O K 1 間 に彼女のカバン 7 学校 e V て、 で 「 逆、 思っ 要りそう たら、 に詰め込ん 逆 ! _ な b

せる。 け、 ナ ろ 11 ので、 を半分くらい下ろし ミレイを部屋から引っぱり出す。 フ ァスナーをきっちり上げ わ たしは彼女 て、 のス < 力 るりと たら を 力 一八 0 かみ、 ンを押 ○度回 フ [転さ アス 付

「あ、あらし~……」

ド 潜り込んでいた。 に脱ぎ捨てられた 名残惜しそうに手を伸ばし 『狂気のボンゴ た先で は 0) 下 あらし にもぞもぞ が

「あの子は学校に連れて W け ませ ん

戻りたがるミ イを引きずって、 階段を下り、

所へ向かった。

「はい、顔、洗って!」

蛇

口をひね

った洗面台

の前にミレイを突き出

顔を洗ったそばから、 わた しがタオルでごしごしふく。

次は歯を磨 世話をし てるみたいだ。 いて いる間に、 そしたら次は店のカウンタ ミレイの髪をとかす。 犬

へ向かい、

⁻さっさと食べる

用意されて e V る 朝食のうち、 ス を半分ちぎっ

そうなうめき声が聞こえたけど、 て縦に折り畳み、 ミレイの 口に雑に放り込んだ。 構 っていられない。 苦

時。 ₽ さんだ。 開 店時 ウン テレビを観ると、 間 からモ ヘリゴラン 0) 隅 I ニン に、 時 ド 初老 刻は グ 開店時 を食べ 0) 男性が لح 13 蕳 来る にその は ひとり 基本 時 常 41 間 連 的 る を 朝 お 回

ていた。 急がないと、 まずい。

お

じいさんは、

何ごとかと口をあん

ŋ

開

ポ やあトーカさん、 クビーンズを乗せたフォークを硬直させて いってきます!」

「マナ、忘れもの」

投げ じいさんから拍手が挙がった。 た。 ーカさんは、 両手でひとつずつそれをキャ そうい 0 7 お弁当を二 ッチすると、 0 5 ょ 11 お

お騒がせしてすいません、 ゆ 9

ス わ た が しは、 はみ出 しているミレ おじいさんに軽く会釈して、 イ の手を強く 引 口 た。 から

間 前 は覚えてな は 本 で 一定じゃ 読 んだ な e V 0) け か 11 っていう話を聞 テ ビ 口 で 出 観 た た偉 0) か いたことがある。 は 忘 人が気づ れ た け 名 時

今日 0) 分と 明日 0 分が 61 つも違うというのなら、

レイ

がうちにや

9

て来て

か

ら数日

が過ぎ、

彼女

0

る。 開始 なん 今日 を睨みつ 扉を開け のチ と教室まであ 学校まで目 0) 一分は つけた。 たら、 ヤイ ムが鳴 わ 案の定、 た 一杯走っ と数歩というところでホ しに優 って 7 しまったのだ。 しくなか アミ先生が半目でわた 間 に合っ 0 たかと思っ た と いうこ 肩を落とし 4 た たち ら にな

いあくびをする。 イが 寒気すらす 一人揃 「いやあ、 って社長出勤 Ź 眼 それ ば か ば ほ わ か どでも」なんてい か た ば な かなか か が縮こまっ そう心の 0 大 物だ 中で叫 たら な、 ながら長 んで、 お 前

「ほめてねえんだけど?」

恐る恐るアミ先生に目をや

9

たら、

片眉をつり 上げた表情が 完全に 殺気を帯び

X × X

ことにつ いて、 少 しずつ わ か り始め てきた。

こ す のは至難の業。 にかく寝起きが悪 朝は自分から起きることがない 11 ということ。 一度眠ると、 0 起

から、 意味がわからない たわずかな荷物の中にあ 気のボンゴ』 もこれも妙なデザインのものばかりだ。 そ 私 れ もタ 服 0 だったけど、 セン チ が スがお 悪 11 なんか怖 つ かしいこと。 起こすだけで その前は た私服のTシ 11 『暴力温泉芸者』。 彼女が 一仕事だ。 ヤ 今 ツ H 持 は は 9 てき そ 狂

いうこと。 そして何より、 Ξ イはとんでもな 11 怠け 0)

う、 話係みたい のだ。 基本的に、 時給が な い時 だから今の にな ほ 料理をするのも、 掃 らってる。 除 رب در ところ、 らい 料理、 掃除も、 洗 濯 わ たし など 全部わり 洗濯も、 がまるで彼女 0) 家事を たし カさ 切 0 世

「マナ、靴下どこ?」

マナ、

はんまだ?」

家ではずっとそんな調子。 ナ、 マナ、 マナ: が 11 7

体今までどうやって生きてきたのだろう 生 活 力 な か。 か、

振る で 舞 e V は変わらないのだけど、 学校でのミ イ - は違っ て いた。 周 囲 からの印象がま 自身

るで違うのだ。

Ŕ でにミ お ま け は は完全無欠であり、 美人 か で、 誰とでも分け隔 何 でもできた。 クラス 中 てなく 勉 強も の信頼を獲得 話 ス ポ す ツ

7

いた。

う 拒 中 ない こか 相手 学二年生レベル が 否 ることがある 日 授業や宿題 している。 ンするケ のに。 日本人 5 が さらさらと解 かミ 一次 1 が 不公平だ。 0) 関数だろうが、 で レイに とユミだろうが、 け 難 くせになぜか英語のみ 「やってあげ بخ 0) ζ. 助け 教科など、 11 それは自分のプライ 間 を求 題が 家でも特別勉強 わたしが家で宿題をや ようか? あ 江戸二六 める声が 問 n ば 題ですらな 3 レイ でコミ 五. 飛 君 年 と 嶋さ ん 口を出 ド は でく 7 0 歴史だ 関 ユ ニケ る。 か る لح 係 9 ん 様 ば な て か そ

た。 もサ 何 体育になれば ラス 相手 ス を 7 力 メ が 出そうとする。 同 でも、 現 ٢ 1 役の選手だっ ` は 君嶋さ どんな種目だろうが バ 「ドゥ そして、 でもバスケでもサ ん ガ て関係な が 口 バレ ナ みんな常に ウジ か 1 つ た。 でもバ ッ 彐 は 力 ス ス 抜 ケ で か 部 b

ひどく落ち込んでい れ ス て引退を決めた時 ケの選手じゃ な た。 0 いらしいけど。 気 持ちがわ ド ウ ン ガと か る 口 ナウジ わ لح 41 二ヨ 7 は

わた 名度を上げていた。 彼女の名前が知れ渡る は 数日でうまく学校になじむことができたようだ。 家ではぐうたら、 今やミレイ しは腑に落ちないけど、 は学校中の有名人といったところだけ だけど学校では のと比例して、 まあとりあえず、 み んなの 全部も急速に 気者。 知

…こんなところにま で

られ 示板に 新たにもうひとり分のイラストが、 でかでかと真 日直仕事を終わらせ、 ていることだ。 例の全部ポスターが貼ってあった。 ん中に。 ポスタ 日誌を届け が数日前と違うことは ポスター にきた職員室 の上に それも 0 貼 掲

達の 切 が 1 が 全 ラスト そ 美術部員なんだけど)、その次の ている。 って 部に入ってからというもの、 のイラストのモデル いた。 ・を依頼・ 入部した次の日には石山くんに きっとスズカがプレ (といっても描くの は、 もちろんミレイ スズカは ツ 自に Ú ヤ 石 は Ш 俄 をか もう出 3 然 ん け 張 彼 友 女

に違いない。

転校生が入っ か た 校 部 内 0 話題にうまく て、 全部はその名前をに ・便乗し た 形 で わ か 噂

広め始めていた。

「ご苦労さん」

ぜるのを何気なく 着 も入れている。 いた。 アミ先生は、 マグカ 意外にも、 ツ 日誌を受け プのコー 見ていると、 ヒー 取 甘党らしい。 りながら自分のデ 一杯に、 アミ先生がわたしに質 それをかき混 角砂糖を三つ ス ク

ああ、 君嶋 の様子、 は · 1 もう、 どうだ。 すっかり 学校 に は もう 慣 n た か な 問をしてきた。

そりゃそうか、 あの様子じゃな」

アミ先生はカッ プを混ぜていたスプーンで、 掲

示板を指した。

無理矢理巻き込んだ感じですけど… あれは、 自然に溶け込んだっ 7 いうよ り、 スズ 力 が

てるだろ。 まあ、 よかったよ。 だから、 クラスで浮 君嶋ってちょっと雰囲気変 いた ŋ す る ん じゃ ない わ

か 本人にはいうなよ。 って思ってたんだけど。 すぐ調子に乗るから」 沢渡の お か げ か b あ、

そう アミ先生は 甘 11 甘 11 を 飲

んだ。

「それ 部 0 助 はそうと、 っ人をする あ れ 0 7 は うまく いう話 11 9 7 る 0 か ょ

は 夕 うをメイ 問も兼任 がなってくれたのだ。 部員が自主 たとき、 X ツ ア チ。 1 先生 そ 顧 間 部活動 0 0) 場 部 7 を 誰 の受け持ちは生徒会だけ 合は 以外 いる。 的 掛 b しているため け 引き受け手 に行うことになる。 の数が多い 持ち は スズカ 顧問と ただ 付きっきりで 7 柄崎中学 して名前だけ貸 Ó) が休部状態 N る 全部 な 先生 基本 か O) つ いる 活 بخ は 12 的 た アミ先生も、 他 は 動 顧 0 は 問 わ 全部を再発 実 生徒 け b ア は は 全部 ĺ ほ アミ先生 先生 は 7 ぼ 会 そ 活 11 0 か ほ 足 顧

「あ、いえ……」

わ

は首を横

振り、

苦笑いする

かな

か

9

例

外

で

は

な

11

0)

だ。

計 張 画 切 は、 0 てポスタ まだ新たな成果を上げていな ーまで作ってみたもの 11 0) 映 神 研 0 依 手

怪 頼み げ た いな な 部 0) 頼みごとなんてしないだろうなって、 は 例外的で、 まともな部活なら、 な

たしでも思う。

がまた変なこと始めたって」 「そうか。先生たちの間でも話題なんだけどな。 沢 渡

ら、 スズカは、 アミ先生は、くすりと笑いながらいった。 わたしも一括りにされてるんじゃないかと思った つい愛想笑いが引きつった。 先生たちの間でも噂の問題児らしい。まさ どうやら

職員室を去り際、アミ先生が、 といった。 目はもう笑っていなかった。 「明日は遅刻すん おそろ な

がすでに揃っていた。 それからまっすぐ部室にいくと、 わたし以外の全員

けど、 ちゃんだけだった。ミレイとスズカは、ゲ ている。 一応、「ごめん、 「あ、 マナ」と声をかけてくれたのはあお 遅くなった」といいながら入った ムに熱中

「だあー! 負けたっ!」

フィンガーグローブを着けた女子高生と、 へっへー、 モニターに映る格闘ゲームの画面には、オープン これであたしの勝ち越しね。 ちょろー 筋肉モリモ

そっちが、 うが女子高生の足下に這 リで金髪モヒカン頭 「ちょっとやり方教えたらすぐこれだもんな。 スズカの使っているキャラクターらし の黒人が いつくばっている。 いて、 モヒカン どうや 黒 要領よ 人 0 ほ

すぎなんだよ、 ミレイは」

とか、 合っ いだ。 ズカが教えたようだけど、 ミレイは、 スズカはうんざりしたようにい ている。 特にスズカとは話が合うようで、 いつも取り留めなく話をしている。 ここで過ごすのにもすっ 今ではほとんど互角に渡 つ かり慣れた 映画とか音楽 ゲームは み ス

「クソ、もう一回よ。 はい は 0 元気なのが口だけじゃない 今度は叩きの め とい 7 あ げ んだけ

るば さっき負けたキャラクターは選ばず、 と大変で面倒なことになるだろう。 でもないことに興味を持たな そんな感じで二人はまたゲー 今はゲームだからいいもの ヴァ かりだ。 ・ダムそっくりの この二人の 夕 ッグなら、 0 キャラクターを選択 いかと、 ムを始め 二人してもっとと ジャン わたしは心配 今までよりずっ る。 ス Ш ク ズ 口 力 は

ヴァン ・ダムのライフが半分く 5 いまで削られたと

ころで、 誰かが扉をノックした。

イとスズカは、 誰だろう?」 と、 気づ いてすらいないみたいだ。 あおいちゃんが立ち上がる。

た。 青山さん」

あれ、

あおいちゃんが扉を開け たら、 意外な人がそこにい

「ああ、 「どうしたの?」

早見さん」

うん……沢渡、 いる?」

ちょっと待ってね」といって、

あおいちゃ

んは

スズ

らついたように「何よ?」と振り返る。 カを呼んだ。スズカは負けそうだからか、 そこで、 ちょっ لح 青山

さんがいることに気づいた。

何だ、 青山か」

何だとは何よ、

さっそく感じ悪

いわ

ね

何か用? スズカは面倒くさそうにしながら、 今忙しいんだけどなあ」 青山さんに近づ

いた。

あんた、 部長でしょ。 今日は生徒会の人間として来

たの

…それ って、 もしかして」

あんたに頼みごとするのは、 途端に、 スズカの目が輝きだし、 ちょっと癪だけどね」 「あおい、 お茶、

て、 お茶をお出ししろ!」「ま、ま、ま、 青山!」なんてふうに、見事なまでに手のひらを ま、座って座っ

返した。その変わりように戸惑った青山さんは、

゙ずいぶんさっきと対応が違うわね……_

ま、 だって、待ちに待った依頼者なんだもの!」 まあいいや……。 それで、 お願いなんだけ

部長席に座ったスズカは、うんうん、 と頷きながら

身を乗り出した。

「今度、『ひかりのまち』があるでしょ 生徒会の代理で出てほしいのよ」 実はそれ

「代理?」

奏楽部が演奏をするからその手伝いと、 ーそう。 毎年恒例で生徒会も参加してるの。 灯籠流しにね」 うちの吹

なるほど、でも、 何で代理?」

で準備とか誘導をして、 「人手が足りないのよ。吹奏楽のほうは、一、二年生 でも、今年は修学旅行がかぶっちゃってて……」 灯籠流しは三年生が参加する

そういえば、

そんな話もあったなあと、今思い

出

染力と死亡率の高 たために、 はずだったの いう形になったそうだ。 本来なら四月の半ばあたりに、 今年の修学旅行は行き先を変更して延期と だけど、 (V 病気が東南アジアあたりで蔓延し なんたら風邪とかいうやたら シン ガ ポ ル 感

方から灯籠流しが終わるまででいい 構やることが多くて人を減らせない 服でなく な灯籠流しのほうを頼めない 元々生徒会の人数が少な いから: 11 上に、 かなと思って。 し。 吹奏楽の だから、 格好も特に 参加は ほう は 簡 単 制

やりましょう、 受けまし よう

話がまだ十分に終わらないうちに、 スズ 力 が手を叩

いた。

え、 0 <u>;</u>

青山さんは拍子抜け

したよう

に訊き返し

は いは もう何だってオッ ケーですよ

スズカ は、 親指立ててウインクする。それから、

駆け寄っ て、 両手で握手を求める。 まるで選

挙活動中 の政治家みたいだ

引き受けてくれるのは助かるけど、 本当に大丈夫な

んでしょうね……」

あまりの調子のよさに、 青山さんは疑いの表情を浮

かべた。

「大丈夫だって、 かりとやらせてもらうからさ。

よろしくね、青山!」

「え、ええ」

その後、部室を出ていく青山さんの背中は、 11 かに

も不安そうだった。

何はともあれ、これで 『神の手計画』 は 応 0) 進展

を見せたことになる。

スズカは、 ルンルン気分で弾けるようにステ ッ

ながら、ポーズ中のゲーム画面に再び向かった。

「さあミレイ、 勝負再開よ。 こっからあたしの大逆転

劇が――」

あー、 あたし、 もう帰んなきゃ」

「え、何よそれ」

「ごめん、今日用事あんだよね」

ミレイはカバンを持って立ち上がった。 スズカは不

服そうに、

「最後までやりなさいよー!_ だけどミレイは 「明日またこてんぱんにしてあげる

きたけど、 からさ」とい こにいったのかはわからないのだ。 そのあとで、 答えられなかった。 い残して、 スズカはミレイ 部室を去って わた の用事につ しだっ 9 て彼女がど いて た。 訊

× ×

家に帰ると、 いようだ。 店の灯りがつい てい なかった。 誰 b

カさんが書いたメモが一枚残されてい 鍵を開けて中に入っ たら、 カウン 夕 た。

なハートマーク・・・・・。 『二、三日で帰るから、よろしくね』 よろしくね、 のあとに女子高生書くみた

e V

ポ

けることになっていたのだ。 そうだった。 今日からト カさんは、 何日 か家を空

ては、 外問わず幅広く る珍品を追い求めて、トーカさんはたびたび家を空け か、 こういうの 不思議でしょうがない。 いろんな場所に飛んでいく。 は 別に珍しいことじゃない。 一体うちのどこにそんなお金がある その範囲は、 売り 物 国

り、 る。 考えただけで、 家事全部をわたしがやらなきゃい いうわけで、 帰 ぐったりしてきた。 ってくるまでミレイと二 け ないことにな

振る いなあ。 真ん中 まかすようにわたしはレコードをかける。それで店の ことをなんとか考えようとした。 もれてて、 面倒くさいの堂々巡りになってきたので、 いた。 け とりあえず今日の晩ご飯どうするかとか考えなきゃ 舞ってくれない な Ó) いんだけど、 もしくは、 念じるだけで料理ができるオーブンとかほ ソファで寝転んで、 ジーニーがお得意の歌とともにフルコ かなあ。 店の奥の珍品に魔法のラン 全然そんな気にはなれなくて、 あー ああ面倒だなあ。 面倒くさい、 それ以外の とか プ とつぶ ース が

になった。 レイを中心に生活は回っているし、 そういえば、ミレイが来てから、 彼女が来てからというも 0 久しぶりに んなふうにソ いつだってミ V

「このお店、こんなに広かったかなあ:

ファでごろごろしたのも久しぶりだ。

自分でも意外だった。 ふつふつと沸 いてきた感情は 寂 しさに似て

ミレイは つ頃帰ってくるの かな。 帰 9 てきたら、

らもう出前でいいかな。 今日は有り合わせで何か作るかな。 お腹すいたっ ていうに決まっ てる。 そうだ、 ゃ っぱ現実的に、 面 倒だか

こともなくなっていた。 やってくる。 考える速度が徐々に落ちて 最近はミレイがいるから、 41 心 地よ うたた寝する (V 眠気 が

れず、 まぶたが急激に重くなっ 目を閉じた。 ていく。 その重力に耐えら

「マナ、マナ」

は目を覚ました。 遠くから名前を呼ぶ声がやがて近くになり、 わ たし

「あ……ミレイ、

おかえり…

゙ただいま」

ミレイは、 わた の身体を揺する手を止める。

ねえねえ、お腹すいたよ」

やっぱり。

わたしは起き上がっ て、 壁 の時計に 目をやった。 ったみたいだ。 b

う夜 何か作ってよ」 の九時を回 0 7 いる。 結構寝ちゃ

ミレイが物欲しそうに いう。 でも、 わたしはまった

くやる気が出ない うたた寝 0) せ で身体が重くて、

もう一歩も動きたくないく らいだっ た。

それが、 今のわたしに出せる最大 の力だ った。

|今日は出前取るよ……

携帯電話から近所の中華料理屋の番号を調べて、

イヤルする。 あ、

えつ・ 今日、 しも もう終わった?」 j 注文お願 41 た (V んですけ

営業時間は八時半までだそうだ。 わたしはもう出前できる店を知らない 0) お 店 が わか ダ X

一ちょっと、 マナ、 どうしたの?」

沸いた夕飯へ

の使命感は、

急激に

しぼ

んでい

った。

「今日は閉店したって。 もう、 そのへんにあるも の適

当に食べて……」

出た、 ミレイの悪意なきわがまま。 なんか作ってよ」

「じゃあ、 たまにはミ レイがやってよ」

やだ。 面倒くさい」

頭 の中で、 かちん、 と火打 石 0 音 が 鳴 る。

ルコ じゃ、 スをね」 61 今から作 ったげる。 ナス 料理の

「えつ?」

麻婆ナスにナス田楽にナス の天ぷら: Š

「わ、わかったわかった!

腕が鳴るわ」

顔を真っ青にしたミレイは、 とぼとぼキッチン 向

かった。ナス万歳。

けるのはどうせわたしの仕事になるのだから、 なさを知るがい いた。 どこに何があるのか全然わからないみたいで、 りもしたけど、キッチンをぐちゃぐちゃにされて片付 「でもあたし、 そういってミレイは、キッチンをがさごそ漁りだす。 普段何もしないからそうなるのだ、己のふがい , , 料理ってひとつ なんてちょっといい気味に思った しかできない か 木 Ś さっさ 9 7

ミレイのいう通りに食材と調味 料を出 してあげ

と手伝ってあげることにした。

何を作るのか、すぐにわかった。

「うん。それしかできないし」「ミレイ、パンケーキ作るの?」

が しめた、 、 、生で一番多く作ってきた料理だ。 と思った。だってパンケ たしかに、「心 ・キは、

臓 はまだ見つけられていないけど、 今まで何回も試

だけ 行錯誤を繰り返して作ってきた。 は、 ちょっとうるさい自信がある。 パン ケ キに 関

しも美味しくなかったら、 はっきり マ ズ 9

ていってやろう。 わたしにはそのくらい の権 利 は あ

それでも全部食べるけど。

る。

だってミレイは、

「マズい」ってはっきりいうのだ。

お手並み拝見、 その手際が意外なほどに とミレイが料理する () 61 のを眺 め 11 る

パンを火にかけておいてから具材を投入するまでの手 卵をボールに開け、 かき混ぜる手つきとか、 ラ

「マズい」っていえないかもしれない。

際とか、

ずいぶんと手慣れている。

マズい、

これは

そうこうしていたら、 あっという間に二人分、 出

上がってしまった。

上げのバターとシロ ミレイは、 ップをかける。 焼き加減も理想的

ちゃっちゃとそれを皿に盛りつけて

仕

なきつね色だ。

「ほい、 できた」

皿を渡され、 力 ウン 夕 席に二つとも並べる。 見栄

えも完璧だった。

「お腹ぺこぺこだよ。

早く食べよ」

「う、うん······」

ゆ ミレイはさっさと食べ始めた。 っくりとパンケーキにナイフを入れ、 その横でわた 口に運ぶ。 しは

一口食べて、あれ、と思う。

いつかどこかで知っていたような、 口目には、 わたしは雷のような衝撃に打た そんな懐か n た。

そのパンケーキには、 「心臓」 があった。 感覚。

なのかわからないまま、足りないと感じていたもの。 何度も何度も作るのに挑戦して、 ずっと、 それ が何

その 「心臓」が、そこにはあ った。

み、 ミレイ、これ……!」

なあに? ミレイは口をもごもご動かしながら応えた。 マズくても文句 いわないでよ」

違うよ、 すごい美味し 0 何でこれ、 作れる ? ?

どうやって作ったの?」

わたしのあまりの食いつきぶりに、 ミレイ は

じろぐ。

別に、 普通の材料 で普通に 作 っただけだけ

たしかに全然変わったところはなかったし、 落ち着けわたし。ミレイの 作り方は、 ずっと見てた。 でも何で

か

った。

それ ゃ いや でこれが、 いやそ んな素振りは全然 それとも何か隠れ たテクニッ でもでも、 ああ落ち が

「そんなに変?」

ように、 わたしがひとり興奮していると、 でもどこか不安げに訊いた。 が 不機嫌な

しっくりきすぎて驚いてるっていうか…… 変じゃないよ。 変じゃないけど、 な ん 7

「変なの」

に平らげていて、 レイはそう笑って席を立っ 皿はからっ ぽだ。 た。 もう彼女はとっく

に自分の作ったもの食べさせたことな か 5

「まあ、

普通のと違っててもわかんな

e V

ゃ

あ

た

ミレイは ソファに腰を下ろしながらいっ た。

生活し たしは聞 そういえば、 7 いたことがない。 たのか、 彼女がエディ そういう話を一度もしたことがな あの場所で、 プスにい た頃の話を どんなふうに

エディ プ ス 13 41 た 時 は 料 理とか な か 9 た 0

勝手に出てくるし、 誰が作ってるかも知らなかった。

必要がなかったから

ね。

ご飯はい

つも用意されてて

他 か ら、 ことも全部そう。 そ れを誰か が わ 作 た 9 7 の身 る 9 0 てこと、 回りのこと 忘 n は 7

体 誰 な か か が 9 たんだ」 やって れてた。 必 要な e V ことは、 ゃ ·る必要

前だ ただ それ は わ あ 膝を から、 そ と思って た いまって 9 たよ。 の生活 吅 くような気分だ 帰 あ た。 e V 誰 0 ったらおかえりっ 0) う。 かがご飯を作 中 中で培われ でも 何て か知らな ね いう 9 たも た。 ح か、 0) 9 7 7 家に来てか 0) 3 からさ、 な 悪 いわ 1 0) だ。 n な 洗濯物干 0 て、 そ ₺ なっ 5 n 0 あ が た 7 ろ 思う。 て は ろ

彼女とは スとは違う レイ 别 は、 生活 人みた 穏や 0 中 か 11 な表情。 にそう で Ξ 11 b イ 9 は た。 かし 少 感 しずつ変わ たら、 傷 的 工 'n デ 普 始め 段 イ

家があ

るってさ」

「あー、後片付けはよろしくね」

ている

0

かも

しれ

な

11

前言撤 回。 Þ 9 ぱ りミレ 1 はミレ 1

ねえ、 マナ。 前 か ら気 13 なっ てた んだけ あ のピ

アノ、誰も弾かないの?

は、 店 0 隅 にあるピア を指差し

゙ちゃんと手入れもし 7 ある みた だけ

P 習ってるわ まあ、 弾かな け じ や な (V わ け 気が やな 向 いんだけどね た時にちょ つ で

と鳴らすく Ġ いかな」

「そうだけど」 「それって、 マ ナ が?」

弾いてみせてよ」

その 眩 しい瞳 に負けて しま

興味津々な顔で

3

が迫

わかっ たよ……」

渋々とピア の前に座る。 れを弾く \$

いぶん久しぶりだ。

いっとくけど、 やる前から保険をかけるあた り、 は弾け 我ながら情 け な

ちゃ

んとし

た

曲

な

4

か

ら

ね

と思った。 そんな気持ちを見透かしたよう Ŕ

は 「わかったから」とにやついて応える。

は、 たった 0) 曲だ。

しはピ

ア

ノを習ったことがな

丸みを帯びて空間に広がる。 ていなかった曲が、 最 初 0) 音 のキ を軽 頭 の中で鮮明に流れ 押 そうし た。 たら、 音 は ぽ 始める。 ばら ん 弾け あ 弾

とは そ 沿 9 7 指を動かすだけだ。

ぱ 出すみた り弾 上手 いはずが のは楽 に、 な ぐるぐるぐるぐる 0 それ 自分 は 0 気持ちが音に わ か 回 9 7 0 た。 いる け なって弾け ゃ

ろう。 だったのかもしれない デ らないこの曲だって、 演奏が必要かといわれれば、 この家にピア プスで 世の中に、 の生活は、 ピアノを弾いたことのない が必要かといわれれ きっと、 そういう不必要が少な 必要ないだろう。 必要ない。ミレ ば 必要な わ 1 誰 た 0 工

絶対にある。 ノの音には、 た。 でも、 必要か不必要かで割り切 そういう大事なもの 言葉ではうまく表せ な が詰まって れ な 61 け بخ 大事 このピ なも いる気が 0 は

その短 41 曲を演奏し 終えると、 ぱちぱちとミレ

拍手した。

だ、 やっぱり、 だからいったでしょ」 あ んまり 上手く な ね

わたし は、 急 に我に返ったみ た 11 に、 恥ずか

なった。

「でも、好きだよ」

る形で腰掛けた。

ミレイは、

こちらに来てわたしの横に、

背中を向け

ねえ、 今の 典 何?!

さんが作った曲なんだ。この家を、 これはね、 トーカさんのお父さん……タツオミおじ 曲にしたんだって」

脳裏に、この曲を楽しそうに、 へたくそに弾くタツ

オミおじさんの姿がよみがえる。

きで、 \$ いつも、 素人のわたしにもへたくそだってわかるくらいだ。 その曲 酔っぱらって上機嫌なおじさん、そのおじさんから、 いつも気持ちよさそうに弾いていた。 その姿はこの家の一部だったのだ。 本格的にピアノの経験があるわけじゃなかった。 の弾き方を教えてもらうわたし。 そんな様子を呆れながら笑っていた。おじさ ŀ その姿が好 ーカさんは で

「へえ。 題名とか、 あるの?」

ミレイは、 **肩越しにわたしの顔をのぞきながら訊い**

た。

「『海が見える家』っていうんだ」 この家から、 海… : は、 見えない け

ら見えなくなっちゃったんだ_ 昔はね、 見えたんだって。でも、 あの壁が出来てか ら、

逃げていた。

毎日の生活に没頭することで、

面倒

「そっか。 好き。すごく、 すっごく簡単で単純な曲だと思うけどさ、 特別な感じがするから……」

い、「ミレイ?」と声をかけたら、 ミレイの言葉がふっと途切れた。 彼女はまた話 どうしたのかと思 始

「今日、 あたし、 エディプスにいってたんだ_

めた。

_あ·····」

りであるということを思い出す。忘れていたというよ れた存在」なのだ。そして同時に、 プス以外どこがあるっていうんだろう。彼女は 用事がある」と言い訳したのだ。 考えてみれば、 わざとふたで閉じていたんだ。 わかるはずだった。 行き先は、 わたしもそのひと 彼女がわざわざ 「選ば エディ

「じゃあミレイ、まさかまた、 わたしは、 恐る恐る訊 いた。 あの怪物と…

それにはわたしの力が必要で、わたしが拒むなら、 があるから、 もなくて、 知っていたはずだ。 かがやるってことを。 決して消えてなくなったりはしない問題か エディプスがあるってことを。 誰かがやらなきゃいけ 引き受ける勇気も断る度胸 そして、 ないこと 他

なことを先延ば す 9 かりとなか 9 たことに

していたのだ。

はまあ、 違う違う、 検査みた コギト な いなも ん てそ んだ ん ょ な 滅 多 出 な 11 ょ 今

な つ た。 1 41 は わ あえて たし 表情 明るく、 が、 あ 深刻そう 9 け 5 か 映 ん と 9 た た か

「検査?」

さ。 だか まり の役立たずで、 いざという時 プ ら研究 にプ 軽く 口 何 しろ、 フ エ 口 **|** フ 0た エ 数自体が極端 って 1 = め それが使えな 11 らな ン に、 ね の力を使 グもするよ。 定期的 41 まだ性質に謎 間 13 9 だ か 7 少な にデー か った な 5 11 運動と一緒でさ、 41 ら、 夕を取 と感覚が鈍るの ら が あ 11 た か る ん ら。 だ んだって しはた そ ね。 あ

何もしなくてもここに は 自分の居場所を自分で e V 5 作 れ る わたし 7 61 る のだ。 とは違 そ 11 んな

毎 日 わたしに は 想像もできな , ,

0 へんの普通の だけど、 て普通 女の子と何も変わりないように見えて やはり彼女は特別なのだ。 過ごし て いる と、 まる でミレ 力があるな は

意志がある。 てきただけの が作り上げたものなのかは 0 問題だけ それは天性の才能 わたしとは じゃなくて、 彼女には 何もかもが違う。 わからないけど、 か、 育 戦えるだけ った環境や経 ただ生き 0 強

「それで、 キナミから伝言でさ。 プロ フェト のこと、

考えてくれたかって」

「……わたしは」

それでもまだ、 わたしは答えが出せ な 41

かんないし、

プロフェトは今のところ、たった二人だ

コギトなんてい

つ現

れる

か

大人も必死なんだよ。

かのためなんかじゃなくて、 マナの好きなようにすればい でもね、 そんな事情は気にする必要ない。 い の 。 あたしのためにやってる あたしだって、 マナ ĺ

んだから」

淀みなく、 ミレイ は 11 いきっ た。

さてさて、 キナミの話もちゃんと伝えたことだし、

そろそろ寝るかなあ」

た。 大きく伸びをして、 ミレイなりに、 わ わざとらしくとぼ たしを気遣かってく けた声で れて るの

だと思う。

一あ、 そうだ。 今日 61 9 てた ひ か ŋ のまち』 9

思 い出 したように、 ミレイ が訊 た。

何

「ああ、 あ れは、 灯籠流しだよ。 毎 島祈念日の

夜にやるの」

「そうなんだ」

そういえばミレイ、 「市を挙げてやるからね。 着ていくものどうする? 結構、 すご 41 規模な h だ 制 服

`ゃなくてもいいらしいんだけど」

「普段の格好じゃダメなの?」

「それって、 あの妙なTシャ ツ ? 応学校を代表し

ていくんだし、 もっとマシな服を・

いけてるでしょ、 あれ」

あれ、 本気でいいと思って着て 41 た 0) か。

美的センスは、 どうもズレている。

いいよ。 服なんか…

じゃあさ、

今度の休み、

買い

物に

じゃん、 いこうよ。 普通に生活する た め に、 う

ちに来たんでしょ? んだよ。そうだ、 普通の一四歳は 浴衣も見ようよ。 休みの日に出 安くても

まだミレイは渋っているようだっ いいの、 結構あるし」 たけど、 その後も

た。

誘 11 続 it たら、 11 に 根負け

「……わかったよ、もう」

参っ た、 というように両手を挙げ は二 階

に上がっていった。

何を糧に生きている ミレイはきっと、 0) 普通 か、 0) 知らない 四歳が 0 んなも のを着て

生きてきたの それと同じように、 か、 知らない。 わた しもミレ イ がどんな世界で

ものなのに、 わたしたちは、 お互いのことまだ何も知らないのだ。 友達で、 緒 に暮らす家族 み た 61 な

るのだろうか。 のだろうか。 ミレイ のことをもっと知れば、 そんな自分の 彼女みたいに、 姿、 今は想像できない。 戦おうって気になれる わたしの考えも変わ

「あっ、あのやろう……」

然に、 カウンターの上を見て、 後片付けを押しつけることに成功したのだ 気づ いた。 ミレ は 実 0 自

× ×

土曜日。 ミレイと出かける約束をした日だ。

たしは結構うきうきしていた。 わたし 自身も買い

物 へ出かけるのは久しぶりだったからだ。

ミレイ、 そろそろ出かけようよ」

ミレイ の部屋をノックしたら、 中 から生返事が返っ

てきた。

立っていた。 扉を開けたら、 今日着ている黒のパ 着替えを済ませたミレイ 力 が鏡 案の定、 前

変なプリントが入りだ。

何なの、 『県警対組織暴力』 つ

血みどろだし」

かっこいいでしょ?」

ん 0 自信満々でミレイはいう。 か。 やっぱり、 買い 物に そのセンスどうにかなら いくことにして正解だっ

た。

「ねえ、 今日 はあらし連れてっ てい

んし

空飛ぶ生物が現れるのはまずい わた しは考えた。 さすがに、 人が多 e V 週末 0) 昼間

0

ワイドショ

1

くぬ いぐるみの フリ でもしとくからさ」

「え、そんなのできるの?」

「できるよ。 賢いから。 あらし、 ぬ e V ぐるみのフ ij

ぐるみぶりだ。 んで多少乱暴に振ってみても、 でても、 つついても、 微動だに 同じ。 しな 想像以上の っぽを ぬ か

あらしを見たら、

もうピクリとも動

7

な

撫

「まあ、 これなら問題ない かな:

「やったー!」

使っているリュックに入ってもらうことにした。 抹の不安が残るので、念には念を入れ、 ミレイが歓ぶと、 あらしもくるくる飛び 回りだし ミレイ

「そうだ、今日、 迎え呼んどいたから」

うれしそうに、 リュックを背負いながらミレ

いった。

迎え?」

そうそう、 運転手。 もう来ると思う」

それが一体誰なのか、 検討もつかなかった。

「串田さん!!!」

よう、久しぶりだ 色の落ちたブラックジーンズに、 ん 11 41 感じに

ね、

マナちゃ

は、 れたネルシャツ。 私服を着るとますますミュージシャンぽさが増し グレーのSUV車から下りてきた

手に入れたと思っ

てんだ……

た串田さんだった。

どく不満そうな顔で、 ミレイ を睨 ん で (V る

たまの非番だってのに、 何でお前 のお守りなんだよ、

ミレイ」

「まあまあ、 プ 口 フ エ トを守るのは ブ ラ ック

務めでしょ?」

でに憎たらし ミレイは、 身体をく い動作だ。 ねらせながら 11 9 た。 異常なま

だよ、 の新車、 大体お前、 少しは悪いとか思わねえのか_ バラバラにしといて、 よく平気なツラして俺を呼 どういうハ ベ た な?

きゃ何もなかったわよ。 たんだから、 だって、 あれは不可抗力じゃん。 被害がバイク程度で済んでよかったじ 逆に、 あたしたちが無事だ コギトさえ出 な ゃ

てめえ、 あのロー ドホ ツ パ 体どれだけ 探

物 たしはすっかり忘れていた。 のブランドロゴで、すごく貴重な物だったらし だったのだ。『RH』という刻印は、 した時、 乗っていたバイク。 ミレイと管制特区に あれ は、 バイ 串 田さ メ

建物が吹き飛ぶくらいの爆発だったから、 近く

あったバイクも、 無事ではなかったようだ。

「それは、 意味が違うだろうが!」

だって、

いつでも乗せてやるっ

ていったじゃん」

出発、 もう、 出発。日が暮れるよ」 済んだことをいつまでもうるさいな 早く

した。 んでいく。 悪びれる様子もなく、 串田さんは、舌打ちしながら、 ミレイは串 田さん 運転席に乗り込 の背中を押

一あ、 あの、 すいません、 付き合わせちゃって…

げる。 悪い 気がして、 後部座席からわたしは小さく頭を下

ブラックバードの仕事だからね いや、 君は何も悪くな いよ。 プ 口 フ エ トを守るの は

何それ、あたしの言葉パクんないでよ」 串田さんは、 笑うとくしゃ っと目尻 わ が 寄 た。

バイクパク ったやつがい ってんじゃねえ

串田さんがキ を回し、 エンジンは豪快な音を上げ

回 り始めた。

そうとしているわけじゃな そ の爆発音は前に進むため 61 に必要なもの ミレイと串田さんも似 で、 車を壊

のだ。 たようなもので、 だから妙に、 そ れが二 微笑まし 0 コ ケ 日 ンな

う わ で か

ぶや モ るだけ多くのお店に 特 巨 に買い 大なシ いた。 ルにした。 物をする場所は決めてなか 日 建物の巨大さに圧倒されて ッピングモ e V けるよう、 ルを見上げ 大型のシ 9 いるみた た ので、 ヨッピング だ。 でき は

する人も珍しい な じだ。 今時ショッピングモ ので、 それはそれで新鮮だった。 ル程 度でここまで感

中

に入ってからも、

Ξ

は

口 が

ぽ

か

ん

ع

開き

9

探 しに燃えてしまった。 一方わたしは、 ギアが入 9 たみた に、 ミレイ 0 服

えさせる レイ 0) は素材がこの は楽しくてしょうがな 上なく N 11 41 か ら 彼女を着せ

性 のを想定していたかのように 的 0) か な わ 0) 似合う。 だって、 い感じで合わせてみても似合うし、 ちょっとわたしじゃ着れない ミレイ が着 ば れば、 まるで彼女が着る よう 大 な 個 ぼ

そのうち、

ミレイ

0)

服を探すというより、

完全

っちり

決まって

しまう

にわたしが着せ替えを楽し h で いるだけになっ 7 61 た。

「ねえ、次これ着てみてよ」

えー:

…まだやるの

うんざりしたようにミレ 試着室に入る。

「うわっ、似合う!」

なった。「そうかなあ?」

ミレ

は、

本当に何を着ても絵に

ちいち興味を示していた。 しょうがないといった様子で、 ミレイ はと いうと、 モ その中でも特にお気に入 ル内のすべてが物珍 見るもの見るもの

一あたし、 こんなに本が集まっ てる場所初 め 見 た

だったのは、

大型の書店だ。

よ!

あると、 サービスでを本を探して、 そういう彼女の目は、 「うわあ、 本当にある ものすごく輝 指定の棚にその通 と何がおか 7 41 た。 りの物が 検索

美的センスは相変わらずで、

げらげら笑っていた。

「あたし、ああいうのがいいな」

指差した先にディスプレイされたTシャ ツ

鈴木爆発』 とプリントされていた。

ちは 途中から りにショ 保護者としてついてきた串田さんだけど、 「あれがいい」とか「これがいい」とか、 ッピングに付き合ってくれていたのだけど、 「なんでもいい」に変わってきた。 最初 それな のう

「だ――……」

串 田さんは、 徒労感たっぷりに息を 0 (V た。

のセットが二つと、 ードコートのテー コーヒーが並んでいる。 ブルの上には、 チー ズバ 串田さん ガ

は、 そのコーヒーを一 口飲んだ。

「まさか、女子中学生の買い物が、 こんなに過酷だと

は思わなかった」

何いってるんですか、

串

田さん。

まだ前半戦が

わっただけですよ」

「えっ?: まだ見るの?」

は

い。だって、まだ浴衣も見てな

串田さんは、 肩を落とす。 吐いた息から、 魂が 抜

出 てくのが見えたような気がする。 -わっ!」

ミレイのほうを見たら、 なんと彼女は、 IJ ユ ツ か

らあらしを出して、 じゃれ 41

「ミレイ、なにやってんの!」

何って、

あらしと遊んでる」

ダメでしょ、 こんな人前で出しちゃ」

空飛ばなきゃ問題ないっしょ」

みたかったけど、 問題あるよ、 未確認生物だよ それだと余計に目立って ! そう大声で突っ 込 ダ

やっぱりミレイは全然わかってない。

あらしを見ていた。それはもう、穴があくくらい ちらりと隣に目をやると、 ベビーカー の赤ちゃ んが

え? 「ちょっとミレイ、見てる見てる、 大丈夫だって、 赤ちゃんじゃん」 超見られてるって」

ミレイは、 笑い飛ばして、 あらしとじゃれ続 け ر چ

いよ 一ちょ っと、 串田さんからも、 どうにかい ってくださ

一ああ、 ごめ Ą 電話だ。 席外すね…

よっぽど疲れたみたいだ。 席を離れる串田さんの足取りは、 さすがにあとで、 よたついて ちゃ た。 んと

お礼をいっておかなきゃいけない。

ようやくミレイは、 あらしとじゃれるのをや めて

は、 ないのがすごいところだ。 ぐるみ状態へと戻った。 ズバーガ 顔だけ ひょっこり出した格好のまま、 ーを食べ始めた。 そうなるともう、 リュ ツ クに入れ 見事に 微動だに た あ ぬ

なと考え始める。 口飲んだ。それから、このあとはどの店にいこうか わたしもひとまずは安心して、 浴衣を見なきゃ 才 けない ンジジ ユ まだ、 スを

「ミレイ、マナちゃん」

あの店とこの店にもいきたい。

いろいろ考えを巡らせていたら、 気づかないうちに

串田さんが戻ってきた。

「悪いが、すぐに出発する」

え?

だってまだ浴衣を見に

いかけて、 わたしは 口をつぐ んだ。 串田さんの目

が、真剣だったからだ。

「招集だ」

串田さんはそれだけ告げた。

日常 レイ の中 で過ごしていても、 の顔つきが、 瞬で変わる。 その時が来れば心はすぐ こんな穏や かな

壁 の向こう側の世界は、 11 つだっ て突然にわたし

り替わる。

そういうふうにできている。 入れることができているから。 そのことを、 ちを呼ぶ。

納得の

41

く理由なんかそこにはなく、

彼女は受け

ミレイは、 すぐに立ち上がった。

MAQGIRL MASTER ARASHI:(Z)

QUE:03 そのまちで\ Butterfly friends.

二〇一四年五月二三日 公開 著・発行 プロジェクト魔Q

http://maqonly.com